
無関心の災厄

シラネアオイ

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無関心の災厄

シラネアオイ

【NNコード】

N5443G

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

オレにはちょっと変わった同級生がいる。ソイツは、ちょっとぼーっとしている、一見無邪気な17歳男。きっとソイツはオレを非日常と災厄に導く張本人。

「春・花小説企画」参加作品です

- - - カラナリの日のプロローグ（前書き）

この作品は、「春・花小説」企画に参加しています。30名以上の方が花や花言葉をモチーフにした作品を展示されますので、ぜひHPの方へもお越し下さい。

では、長くなると思いますが、最後までお付き合っていただけ幸いです。

サクラを見ると、思い出す光景がある。

それはまだ新しい去年の春の記憶。

「マモルちゃんっ」

感傷に浸りかけた瞬間、オレの腰をものすごい衝撃が襲う。

全く……！

振り向いたオレの目に飛び込んだのは、両手に花束を抱え、にこにこと笑う愛らしい先輩の姿だった。

「……先輩、後ろから突然タックルかますのはやめてください。そのひびオレの腰が折れますから」

怒鳴るつもりが毒氣を抜かれ、やんわりと、あくまでやんわりと先輩を押しとどめたオレはふう、とため息をつく。

頭のてっぺん近くに纏めた髪が跳ねていて、オレの田の田の前でふわふわと揺れた。

両手いっぱいの花束を見て思い出す そう、今日は卒業式。今も窓から見える校庭では多くの卒業生たちが集団で写真を撮つたり別れを惜しんだりと忙しなく動き回つている。

部室の窓から綻び始めたサクラを見ていた在校生のオレに恨みでもあるのか、卒業生の集団に混じることもなく、全身全霊の突撃を決行したのは、文芸部の3年生、枝守スミ。

「」卒業おめでとうござります

「ふふ、マモルちゃんでも寂しそうな顔するのですね。ありがとうございます。でも、残念ながら似合わないのですよ。」

「……ちょっと黙つてください、先輩」

ああもう、黙つていれば愛らしこの姿、もつたいないとしか

言いうがない。

珍しくちゃんと制服に身を包んでいる彼女の中身が到底見た目通りでない事を、オレがよく知っているとしても。

ところが、大きな瞳でオレを見上げた枝守スミレー8歳女は、先ほどまでオレが見つめていたサクラの木を指差して首を傾げた。校庭にぱつりと佇むそれは、何年も前の卒業生が遺した卒業記念樹らしい。

「マモルちゃん、あの木の下、誰かいるのです」

先輩の指さした先、オレは目を疑つた。

満開とは言えない淡い桃色の花の下、銀色の毛並みが揺れていた。

「……梨鈴」

思わず口から零れた名は、春を運ぶ澄んだ風に紛れて消えていつたが、オレの足は考えるより先に動いていた。

あの影は

「ちょっと、マモルちゃん！　どこ行くのですう？！」

叫ぶ先輩の声を背中で聞き流しながら、部室から飛び出して、靴を履き替えるのもそこそこに校庭を駆け抜ける。

銀色の毛並み

それは、珪素生命体である証。

珪素生命体は、オレたち炭素生命体とは生命体としてのレベルで一線を画す、珪素ベースに創られた新規生命体。その姿は總じて人間に近いが、耳や尾、目などの様々な箇所が獸を模している。

そんな珪素生命体の一人が、つい1年前までこの桜崎高校でオレたちと共に在った。

だからこそ、桜の木の下に銀色の毛並みを見たオレは走り出していたのだ。

しかし、卒業証書を手に友達と記念撮影をする卒業生たちの間を縫い、息を整えながらサクラの樹の下に到着したオレの目の前に、銀の毛並みを持つケモノの姿はなかつた。

ただ、咲き始めのサクラがひらひらと花びらを落とすだけだ。

いつたいオレは銀色に何を期待したんだ。

「……まさかな」

姿かたちだけでなく生活も獣に近い珪素生命体は、本来ならいわゆる『人里離れた山奥』で自然と共にひつそりと暮らしているはずだ。郊外とは言え都内、私立桜崎高校の敷地内に現れるはずはない。天然記念物のイリオモテヤマネコが東京都のど真ん中で飼育されているくらいにあり得ない。

そんなイレギュラーは、一人のキツネ少女だけで十分だ。オレは自分自身を嘲笑いながら、サクラの幹に手をあてて目を閉じた。

卒業式が行われた、まだもう少し肌寒い日の出来事だった。

サクラを見ると、思い出す光景がある。

それは、あの意地つ張りなキツネの最後の笑顔

ああ、なんてこった。

これは突つ込むべきか、突つ込まざるべきか。

オレは背を丸めてじっと机の木目を見つめ、自問自答していた。
そうだな、つい先日卒業してしまった『ゴッドファーザー名付け親』枝守スミレに
『口先道化師』というありがたくもありがたくない称号をいただいたオレとしては、一応突つ込んでおくべきだろ。

「ベタすぎる……」

ああ、突つ込みにも力が入らない。
その原因はオレの隣の席にある。

今日は新学期最初の登校日、いわゆる始業式というヤツが終了した教室。また高校3年ともなるとクラス替えで騒ぐのもアホらしい、それぞれに知人を見つけ、普段の昼休みと変わりない様相を呈していた。

無論、ベタだ、というには全く別の理由がある。

新学期の転校生が無口な美少女、ここまでよかつたのだが、なぜだかオレの隣の席に。そして その転校生が、ひたすらオレに視線をくれているというこの状況。

肩甲骨を隠すほどの艶やかな黒髪を艶脂色のバレッタで留め、深緑のブレザー制服をきつちりと着こなす和風美人、見られているのか睨まれているのか、オレには見当もつかないような無表情。

助けてくれ。空氣をくれ。息がつまりそうだ。

誰でもいいから。この際、腹がたつほどマイペースな同級生でも、この間卒業した半端敬語の可愛い先輩でもいい。マイペースの方は何故か始業式が終わってなお一度も姿を見せていないのだが、オレが張り紙を見間違えていない限り同じクラスであり、アイツとオレの縁がそんな簡単に切れるものではない事も重々承知している。

とりあえずホームルームが終了して、新年度最初の清掃が始まる

までの時間、オレの代わりにこの熱視線を受け止めてくれ！

オレの焦燥に反して、周囲は気づいていながらこの状況に口を挟めないでいるようだ。個人携帯端末をいじったり、何となく遠巻きに見つめてみたり、完全に無視して集団で話しかねんだり。

気になっている事は確かだろ？が。

転校生が来たらとりあえず話しかける優等生はこのクラスに存在しないのか？！

と、あきらめかけたその時。

「おはよう、マモルさん」

おお、オレの名を呼ぶ救いの神の声！

起き上ったオレの目には、声から予想した通りの間抜け面が飛び込んできた。香城夙夜、今この瞬間限定でオレの救世主にしてオレ以外では唯一の文芸部員。

「ああ、おはよう……ってお前、とっくのとつに始業式は終わってんだぞ？」

「うん、だから、そりじゃないかと思つてこの時間に来たんだ」

確信犯かこんちくしょく。

それでも始業式に出席しなくても掃除には来るのでから、ある意味真面目なのか？

超絶マイペースなオレの同級生は、先輩が卒業してからはオレとたつた二人の文芸部員となるのだが、いつも通りのへらへらとした笑顔でオレを見下ろしていた。

「香城くん、おはよう。遅かったわね」

「おはよう」

クラスメイトにひらひらと手を振つて、マイペース男はオレの前の席に座つた。

始業式当日にネクタイをしてこないのもそつだが とつあえず

夙夜、そこはお前の席じゃねえ。

熱視線にやられて声も出ないオレの代わりに、クラスメイトの『才女』萩原加奈子が困つたように夙夜に告げる。

「香城くん、君の席は向こうの端っこの一一番後ろ。そこは原田くんの席だから移動してくれる?」

「んー、それじゃ、そのハラダくんと席を代わってもらひつことにす るよ」

じさりと鞄を机に置いて、夙夜は席を占領した……すまん、原田。窓側の最後尾という最高の立地条件の席を提供するから許してくれ。席に戻ってきた原田は、多少文句は言つたものの、萩原の説得に応じてしぶしぶ席を移動した。

ほんとにすまん、原田。

それに免じて、今の一連のやり取りで分かつてしまつた、オマエが萩原に好意を寄せているという事実は隠蔽してやるから。

「ところでさ、さつきから聞きたかったんだけど」

夙夜はさつきからオレが見ないようにしていた方向を向いた。

ああ、前言撤回。コイツは救いの神でもなんでもねえ。

「何でこの子、マモルさんのことずっと睨んでるの?」

そしてオレは終護ひこまき。17歳男、文芸部所属、このマイペース男に振り回される苦労人（自称）。

頼むからこれ以上オレの周囲をかき回さないでくれ。

思わず顔を手で覆つてしまつたオレに周囲の状況は分からなが、どうやら才女である萩原を持つてさえ触れられなかつた話題にあつさりと切り込んだことで、教室全体の空気が氷点下まで冷えたのは確かだ。

ちくしょう、これはオレのせいじゃないぞ！ 全くタイミングを考えないこのマイペース野郎のせいだからな！

「それに、君はもしかして……あ、やっぱりこれはいいや」

途中まで言いかけた言葉を飲み込んだ夙夜は、何の話だっけ、と首をかしげてしまつたようだ。

このマイペース男が勝手に脳内処理して片付ける問題の多いこと多いこと ただし、脳内処理だけで片付いていた問題をすべて口にすれば、人間から逸脱するほどのモノになることも知つてゐる

がな。

だからといって途中でやめんな、バカ野郎。この凍りついた空気をどうしてくれる……！

仕方ないのだ、巻き込まれるのがオレの性分なのだから。涙目でおそるおそる顔をあげると、隣の席の転校生がすつきりとしたアーモンド型の目でオレを睨みつけていた。

ひい！ やっぱ無理！ 口先だけのオレには無理！

彼女は先ほどの自己紹介と同じ、淡々とした口調と消えそうな声で最初の質問に答えた。

「……知っている人に似ていたから、気になっただけです」「それ睨む理由じやないんですけどー？！

「あなたが」

和風美人はオレを指差した。

ヒトを指さしちゃいけませんって小学校で習いましたかー？！

「私の知っている人にとってもよく似ています」

これ、アレですか？ 新手のナンパですか？ 教室で？ 何狙いですか？ 自分で言うのもなんだが夙夜と違つて普通の高校生だから残念だけど金なんてないからな？！

つてまあ、相手が無表情美人じやなけば得意の『口先道化師』が炸裂するんだが、今のオレは完全に委縮している。

ヘビに睨まれたガエル、マングースとハブ、ネコとネズミ、無表情美人と口先道化師。

「そうなの？ よかつたじやない、柊くん」

いや、それ、ちょっとチガウヨ、才女萩原。

見つめているわけじやないからね、この美人。睨んでるからね、確實に。

「うん……そか、そうだね。そつなんだね」

ところが夙夜は一人、うんうんと頷いてにこりと笑つた。

さつきは何か言いかけてやめるし、今度は一人で納得……あとで

とつちめる必要がありそうだな、こりや。

「お名前を聞いてもいいかな？」

夙夜がにこにこと転校生に尋ねた。

おお、スゲエぞ夙夜。その団太さを今だけは称賛してやるや。……
今だけは。

だが、オマエが遅刻したさつきのホームルームで自己紹介は終わつてるからな。一応忠告しておくが。

ああ、今日は調子が出ない。声も出ない。何もかもこの転校生のせいだ！

「白根葵です」

その美少女転校生が、ぽつりと名を呟いた瞬間が、さつとその始まり。

オレの受難の始まり。

「シラネアオイ……『完全な美』だね」

またも意味不明な言葉で笑つたコイツはオレを災厄に放り込む天才だ。

見ろ、転校生の表情を！ って、さつきから表情が微塵も動いてねえよお！

「よろしく、アオイさん」

笑顔で握手を求めるコイツの神経だけは信じられない。

ああ、最悪のハジマリだ。

まだ始まりだつてのに、もうバッドエンドまで見通せそうじゃね？

そんな事を考えていたからだろうか。

人生最悪のイベントつてのが早速やつてきやがつた。

次の日、つまり始業式の次の日、オレたちを待つていた現実は、警察に占領され、閉ざされる桜崎高校の門扉だったのだから。

02 : 奈落といのちの序奏（前書き）

なんとなく残酷描写かもしません。
警戒せよわざとじやないですが。

コトのハジマリは簡単だ。

校舎の角を曲がった。

そしたら、ヒトが死んでいた。

ただ、それだけらしい。

言葉にしてしまえばたったそれだけの事なのだ。

偶然にも……いや、教室で雑談していた夙夜が騒ぎに勘づいたのだから必然だろう。オレと夙夜は、のこのこと騒ぎの中心へ出掛けに行き、凄惨な現場を直視するという愚行を犯してしまった。

どうやら人間、驚き過ぎると思考が停止するらしい。

「……萩原」

校舎裏に集まつた生徒たちの悲鳴が飛び交う中、オレがかろうじて呟いたのはそんな言葉だつた。

なにしろ、そこに血塗れで倒れていたのはオレのクラスメイトだつたから。

素人目にも分かる、致命傷は喉の傷だ。

目にするのも憚られるほどにぱっくりと開いた傷口は、もはや傷口とは呼べないだろう。血が流れ切つて気道や血管の断面が見えるほどのアレは、首を切斷したと言つた方が正しい。ほとんど皮と肉一枚でつながつているだけの、絶対的切断面。

オレは自分の視力のよさを呪つた。

隣で佇む夙夜ほどじゃないが、オレはこれでもメガネ・コンタクトの類とは無縁の生活を送つていて。別にそれは勉強しなかつたら、とかそう言うわけじゃないんだが。

一発目で直視してしまつたオレは、全身の血が頭からつま先までざあつとひき、体温が下がるのを感じた。すぐに目を逸らしたのに、つつきりと脳裏に焼き付いてしまつたのは仕方がないかもしない。

周囲には悲鳴と泣き声が散乱し、それがさらに傍観者を呼び寄せる。

が、瞬間、人ごみの中からこちらを睨む美人転校生とばっちり目が合った。流した黒髪は今日も美しいぜ、『無表情美人』白根葵なんて余計な事を考へても脳裏に焼きついた映像が消える事はない。

もう出血していないところから見て、血が流れ始めてからずいぶん経つたのだろう、赤黒い絨毯が敷かれた裏庭の芝生の上に、見知った顔がごろりと転がっているのは、残念だがオレにとつては衝撃的過ぎた。

体は伏せついているのに顔だけは上を向いている。絶対的切断面をオレの方に向けて。

昼休みになると、生徒達が弁当を広げる事が多い芝生のこの場所が、普段と全く違う場所のようだつた。

慌てて走ってきた教師が大きな白い布をかけたがもう遅い。携帯端末で上の階の窓から乗り出してから撮影しているヤツさえいたのだ、その神経は全く理解できないが、これだけの生徒が集まつてしまつては隠蔽など不可能だろう。

萩原さんが、ここで首を切られて死んでいた。

アア、気持ち悪い。

脳髄と胸中がぐるぐると渦巻いている。

なんだこれ、気持ち悪いってこんな酷い感覚だつたか？

クラスメイトのあの姿を目撃したという現実を拒否した思考が麻痺したように動かない。

何だよ、いつたい何なんだよ。

何が、どうして、どうなつて、ああして、彼女は、萩原は、昨日まで、教室で、笑つて、よかつたねつて、笑つて、教室で、どうして、今は、朝は、斬られて、血が、流れて、止まつて、広がつて、笑つて、笑つて、あの日で、アノ目で、アノ顔、デ、アノ目アノ顔アノアノアノ……

音が遠ざかっていった。喧騒は、フィルター挟んだ向こう側。

「……さ、だ……ぶ？」

隣にいる筈の夙夜の言葉も聞こえないほどオレは完全に理性を吹き飛ばしていた。

複数名の女子生徒のように、貧血でぶつ倒れるつことだけは免れたが、オレはある瞬間、完全に世界を放棄していたと思づ。やけに心臓の音が耳元で響いていたのだけ覚えている。

オレの意識がようやく正常に回転し始めた時、目の前にはいつものようにノーテンキな男の顔があつた。

「……夙夜」

「あ、やつと帰ってきた」

にこり、と笑う夙夜。

小さな丸いテーブル挟んだ向こう側、目の前には冷めてしまったコーヒー、右手には大量の花　　花？

はつとして周囲を見渡すと、そこは花の王国だった。

ああ、ちょっとと言い方が陳腐だつたな。

美術の苦手なオレがおおよそ知っているであろう色の名前をすべて並べても足りないだろう、見た事もないほどの種類の花がガラスケースを埋めていた。

それだけではない、鉢植え、バケツ、棚の上まで、至る所が花、花、花。

花の名前に明るくないオレがこの光景を言葉にするのは非常に難しいが、重そうな頭をもたげたユリや大きく広がったカスミソウくらいは認識できた。あと、ちっさいひまわりと、赤いバラ。

天井や壁・床は木目を基調にしたシンプルなもので、時折手描きと思われる花のネームプレートが飾つてあるのが微笑ましい。

さて、こういった類の光景は過去見た記憶がないのだが。

「……どこだ、ここ？」

「あつ、マモルちゃん、やつとお目覚めなのですねつ……この頃。

振り返るまでもなかつたが、とりあえず振り返る。すると、そこには花の精がいた

「先輩、何ですか、その格好」

「これですか？ これはアルバイトのコニーフォームなのですつ。 マモルちゃん、かわいいと思つたら褒めていいのですよ？」

そうだな、花の精というよりは『花の国のアリス』とでもいったところか。

ふわふわと広がるのは、確かエプロンドレスとか呼ばれる類のものだ。淡い桃色をしたそれは、掛け値なしに小柄な先輩にとてもよく似合つていた。ぐるりと回るたびにレースがふわりと広がり、髪をまとめたすみれ色のリボンが風に踊る。

髪に差した紫の花は、もしかするとスミレなのかもしれない。何より、レースをふんだんにあしらつた白いニーソがモロ、オレの好みだ。

よし、認めよう。かわいい。

「ええ、可愛いです」

不本意だが、心の底からの本音だ。

それを聞いた先輩は嬉しそうに笑つた。

「ここは桜崎通りからひとつ路地に入ったところにある花屋さんなのです。きっとマモルちゃんは覚えてないとと思うのですが、ワタシは今日からここで働くのですつ」

ああ、それでアルバイトの制服。先輩は、高校卒業して花嫁修業なのです、とか言つてたから要するに体のいいフリーターなのだが これもその一環なのかもしれない。

が、それにしても、本当に可愛い。見た目だけならオレの好みの粋を極めたと言つてもいい……そこ、ロリコンとか言つたな。

よし、とりあえずよくやつた、まだ見ぬ花屋の店長！

ひそかにガツツポーズ。

「だが、何でオレがこんな所に……」
と、自分で言いながら思い出してしまった。
フラツシユバツク。

脳裏に焼きついた光景が目の前に蘇る。

クラスメイト。教室。赤黒い絨毯。切断面。悲鳴。笑顔。顔。死体。顔。『オ女』萩原加奈子

うつ、と口元を押さえたオレの背を、先輩がさすってくれた。
「マモルちゃんが大変な事になつてたから、シユクヤくんがここに連れてきたのです。ここは小さな喫茶にもなつていますから、休むといいのです」

「……ありがとうございます」

いつたいどれほどの時間、放心したオレの向かいに夙夜が座つていたのかは知れないが、目の前にあつたカップの中のコーヒーは完全に冷え切つっていた。

氣を落ちつけるように一口ずつ胃に流し込んで、一息つく。

目の前の惨殺死体は消えなかつたが、それでもよつやくオレの理性が手元に戻つてきた。

「いつたい、何だつてんだ」

どうして萩原があんな事に。

特に夙夜に向かつて咳いたつもりはないのだが、新しくコーヒーを淹れに行つてしまつた先輩を除けば、オレの独り言を聞くのは一人しか残つていなかつた。

「んと、警察の人と先生の話だと、生徒が登校する前、鋭利な刃物でばつさり。失血死だけど、もしかすると直接はショック死かもしれない。物理的に自殺の線はないから、犯人捜索中」

オレの疑問に答えたつもりであろう夙夜は、満足げに自分のコーヒーを口にした。

が、冷たつ、苦つ、と言つてすぐに止めた。なら飲むな。

それより、今の情報はあからさまに一生徒が持つていていい情報じゃないと思うのだが。のちのち噂としてそういう話を聞く事はあ

るだろうが、現時点では極秘事項のはずだ。

「……それ、どこで聞いた？」

「教室」

「教室でそんな事をべらべらしゃべる教師と警察がいるか。また校舎の反対側の盗み聞きか？」

「盗み聞きじゃないよ。聞こえたんだから」

「ああ、そうでした。コイツはそんなヤツでした。」

忘れるわけじゃないのだが、あまりにオレとの感覚が違い過ぎて時々ついていけなくなる。コイツが見た目どおりではおさまらないことは知っているのだが、あまりに見た目とのギャップがでかすぎるのだ。

「」の同級生が持つ並はずれた視力は、聴力は、空間を超越してしまつ。それはとても便利で、とても厄介だ。オレがそれに気づいたのは偶然で、また誰に話す気もないが、おそらくその能力は人間を逸脱している 並はずれた能力故の無関心、マイペース。

いまここでオレと会話をしている事が奇跡に近い。

再度現実を突きつけられ、頭を抱えたオレと対照的に、夙夜は淡淡と続ける。

「あとね、すごく気になる情報が」

「おお、お前が気にするとは珍しいな。とりあえず話してみる」
いつたんコイツの事を再認識すれば、もううたえる事はない。そう思ったのだが。

「あの切り口、たぶん、やつたの、シリカ

オレは夙夜の言葉で再び理性とサヨナラせざるを得なかつた。

たつぱり3分ほど、オレは夙夜の間抜け面を眺めていたんじゃなかろうか。

「マモルさん、今日ははずいぶんとのんびり生きてるねえ」

意味が分からなかつたわけじゃない、飲みこむまでに時間がかかつただけだ。

「……夙夜、それは、それも警察の話か？」

「ううん、違うよ。オレが見たんだ」

ああ、そうか。

こいつちが焦るほどの天然マイペース男は、尋常ならざる能力の持ち主だ。

オレが理性を失っている間、コイツはその並はずれた能力で以て現場の状況を記憶してしまつたに違いない。ひょっとすると萩原さんの髪一本一本、飛び散つた血の一滴一滴まで……

またフラッシュバックしそうになつて、慌てて頭を振る。

新しくコーヒーを運んできてくれた先輩も、隣のテーブルから椅子を引っ張つて、オレたちと同席した。

「あの切り口を作つたのは、たぶん珪素生命体の爪だよ。あの半端な鋭利さと半端な裂け具合は、磨かれた刃物じゃないと思う

オレは、熱いコーヒーをもう一口。

舌の先がピリピリする。

「珪素生命体の爪は水晶だから、有機生命体とは強度が違う。軽く振つただけでも、人間なんて簡単に傷つけられると思うよ」

「ふふ、シユクヤくんは相変わらずよく見てますですね。優秀な探偵さんになれるのですよ」

水晶 硬度7、無色透明、酸化珪素の純結晶体。

タンパク質 ペプチド結合により極めて軟弱、かつ脆弱。炭素ベースの重合体。

切断面、血、切断面。

珪素生命体の爪。

引き裂いて。傷つけて。斬り、裂き、削り、千切り、壊し。

死。

「……頼む、やめてくれ」

奈落の底へ落ちそうになつた意識を繋ぎとめ、喘ぐ。

無邪氣は残酷、無知は罪、無関心は絶望。

オレは何か間違つているだろうか。心が弱いのだろうか。

「オマエに他意がないのは分かつてゐる。でも、夙夜。オレは……そんな話、まだ聞きたくない」

クラスメイトの死を田の当たりにしたのはつい先ほど之事で、ズキンなんていづなまつちょろい言葉じや表現できないようなモノに胸を抉られた。

確かに事実とはいえ、そんな話はまだ、聞きたくない。

「……わかつたよ、マモルさん」

少し人間からズれた所にいるコイツに何が分かつたのか、オレには分からぬ。

オレの内の『当たり前』の感情が『当たり前でない』夙夜に伝えるのは、口先道化師を以てしても酷く難解だ。

この混沌。この焦燥。この苛立ちと、怒りにも似た無力。

言葉にするには雑然とし過ぎてゐる。整理するには、脳が麻痺しそ過ぎてゐる。

ああ、やっぱり今日も調子が悪い。

「マモルちゃん、今日はもう帰るのです。一晩よく寝て、明日もがんばるのです」

そう言つてにこりと笑つた先輩は、クラスメイトの死に動じない夙夜の事をどう思つてゐるのだろう?

オレには、何も分からなくなってきた。

夙夜は首を傾げ、苦いと言つたコーヒーを飲み干して、ふう、と息をついた。

「マモルさん、もつ萩原さんに会えないのは、とっても悲しいね」「何故だろう。

淡々と語り、血も死も恐れぬコイツの口から出た『悲しい』という単語が、悲痛なほどに感情を表わしていると思つてしまふのは。だからオレは、そんなコイツを見限る事が出来ないんだろう。「明日お葬式だよ、一緒に行こう。そこで、サヨナラして来よう」「……ああ」

その時の夙夜はいつもと違つて、悲しそうに笑つていた。それでも、笑つていた。

帰ろうかと立ち上がったオレに、先輩は一本の花を差し出す。白く小さな花びらが集まって、ああそつた、アレに似ている。小学校の時に花壇で育てたマリー・ゴールド。鮮やかな橙色をしたアレの花弁から色をぬけば、ちょうどこんな感じになる。

先輩は満面の笑みでそれをオレに押しつけた。

「イベリスという花なのです。かわいいでしょ? 遊びに来てくれたお礼に、あげるのです」

「ありがとうございます」

受け取つたオレを見上げ、先輩は挑発的に笑う。

「マモルちゃんはイベリスの花言葉、知つてます?」

「知りません。何ですか?」

尋ねると、先輩は微笑した。

「『無関心』、ですよ」

店を出た夙夜とオレは、桜崎通りをまっすぐ東、駅に向かつて歩いていた。オレは自宅が駅のそばだから。夙夜はここから2駅の所にあるマンションに住んでいるから。

まだ一日は半分しか過ぎていない、真上に太陽を感じながら、駅前の小洒落た店が並ぶ坂の道を、駅に向かつて下つて行つた。

すぐ横を無音で車が駆け抜けていく。10年ほど前からガソリン

自動車を電気自動車に転換したことで交通事故は増える一方だとうが、それも領ける。オレが子供のころは、まだ自動車が凄まじい騒音をたてて走っていた気がする。

前に視線を戻せば、タイルで舗装された歩道にまっすぐに並ぶ黄色のラインが駅に向かつて果てしなく続いていた。

「夙夜、オマエ、この視覚障害者用の点字ブロックで足ひねつてたよな」

「……一年も前の話なんかしないでよ、マモルさん」

「こんなモンに躡ぐバカが他にいるか」

「ぐだらない会話、でも、それがいい。

このマイペースな奴には血だとか死だとか、珪素生命体との確執だとかは似合わない。頼むからオマエは、そのまま内に飼っているケモノを眠らせておいてくれ。例え世界の方がオマエを放つておかなくなる日がいつか来るとしても。

「あ、マモルさん。コンビニ寄つてプリン買っていい?」

「そうそう、激甘党かつプリン魔人のオマエは、そうやって新作コンビニープリンでも食つて喜んでろ……って、ああもう。このギャップで力抜けるぜ、バカ野郎。

例えそれがオマエの作り上げた興味だとしても。

でも、もちろん、人生そんなに甘くないってのが通説だ。オレの予感つてのは、極端な能力を持つ夙夜並みじやないとしても、それなりに当たるのだ。

「あー やべえつて。これ、オレの思つた通りだつて

思わず口からそんな言葉を漏らすほど。

なにしろコンビニ袋を提げたオレたちの目の前に現れた黒髪美人は、相変わらず表情ないアーモンドの瞳をまっすぐオレと夙夜に向けていたのだから。

始業式も終え、春のポカポカした陽気だといつのに、オレの周囲だけソンドラ気候。

助けて、地球温暖化。

「こんなにちは、アオイさん」

「……こんなにちは」

おお、白根葵が意外と普通の挨拶を返してきたぞ。それでも、恐ろしく冷えた視線に変化はないが。

無表情美人の彼女は、当たり前のように淡々と告げた。

「私は、あなたたちと、お話をしたいと思つています」

「……は？」

まるで機械のような、意味不明な言語が彼女の口から飛び出して、オレは思わず口を開けて固まってしまった。

やべえよ、これ以上呆けてたら気づかぬうちに一日終わっちゃうよ。

ぶるぶる、と頭を振つて、オレは深呼吸。一回、一回。よし、落ち着いた。

「マモルさん、やつぱり今日はのんびりだねえ」

だいじょうぶ、隣のマイペース男の言葉は聞き流せ。敵（と呼ぶのが適切かどうかは知らないが）は珪素生命体でなく人間、そして、転校生の女の子。

「ええと、白根、だつたか、オマエ、オレの事を見たことがあるとか言つてたが、そりゃ本氣か？」

「事実です」

よかつた、とりあえず会話は成立するようだ。

「あなたは、私が搜索している人物である可能性があります。だから、私はあなたと話がしたいと思います」

いや、これ、成立してるとか？

「ねえ、マモルさん、俺お腹すいたな」

「……」

「この野郎、残酷から天然に戻つた途端コレか。目の前にクールビューティ、背後に天然。

オレってやっぱ不幸体質？」

仕方なく、オレたちは近くのレストランに腰を落ちつけた。フランチャイズの、学生に優しいお手ごろ価格。高校から近い事もあって、なかなか繁盛している。

きっと今日、突如休校になつた事も関係しているだろうが。

向かいの席にはしつとりとした黒髪も美しい無表情美人。うーん、残念ながらオレの好みは美人系じゃなく可愛い系なのだ。

お昼時だというのに、隣の激甘党は迷つた拳旬にパフェを3つも注文しやがつた。

オレは普通にパスタ喰うけどな。

お勧めされていた菜の花とボルチーニの柚子胡椒スパゲティを注文し ボルチーニのがいつたい何なのかは分からなかつたが お冷を含んで一息。

さて、本題に入ろうか。

じういつた問題は、たいてい先送りにしていい事なんてあまりない。

腹をくくつたオレに、ようやくいつもの調子が戻ってきた。ビーグール。夙夜のような特殊能力を持たないオレは、焦つた時点でジ・エンド。

状況を把握しろ。思考を止めるな。

情報は財産、思考は凶器、言葉は魔法。それらは、マモルちゃんの唯一最強の武器なのです そう言つたのは、あの可愛らしい先輩だったか。

「さて、オレとしてはいろいろ言いたい事がある訳なんだが、まずはどちらの話を聞こうと思う。後手に回るのは卑怯だとか言つくなよ？」

そつちが先に吹つかけてきたんだからな」

少々喧嘩腰なのは、クールな相手に対抗するための一つの手段。

それから、無表情美人の迫力にもう負けないようにするため、自

分にかけた暗示。

受験の年の新学期に、これ以上問題を残しておきたくない。面倒くさいで済むうちに、片づけておきたい。

あ、オレ今年受験生か。自分で言つて凹んだ……ではなく。「まず、オレはオマエの事を白根と呼ぶが、それはいいか?」

「構いません」

「じゃあ、白根。とりあえず、オマエが誰かを探している事は分かつた。オレは、その誰かに似ているのか?」

「似ています」

「その、オレに似たヤツってのは、いったいどーで、どーいう状況で見たんだ?」

「それは言えません。秘則です」

ヒソク? 秘則。

秘密の規則。又は、秘密にするという規則。

ここでは後者だろう。

秘則。規則。法則。

そこには、確実に『規則を定めるモノ』が必要なはずだ。

コイツは個人でオレを、もしくはオレに似た誰かを探しているのではなく、誰かに命令されて搜索を行うという事を裏に秘めていると見て間違いないだろう。

困ったな、これはどうやら思つていたよりずつとオオゴトらしい。

最初に問題なのは、白根の言つ事が『妄想』なのか『真実』なのか、だ。この手の話しぶりで、よく虚言を吐くヤツをオレはよく知つていて。

だいたい、突然現れた転校生がオレを探していて、しかもそのバツクには何らかの組織が……なんて、ベタにベタの上塗りだろう? 話半分に聞いて、これから対策を適当に立てておくのが正解だ。オレはただの平凡な男子高校生。『名前だけ主人公』と称されたからには、そんなドラマチックな展開が待つてはいるとは思わない。すまん、質問の順番を間違えた。オマエは、なぜソイツを探して

いる？」

「それが現在の私にとつて至上命題だからです
何の答にもなっていないが……やはりそうだ。

「この転校生の上には、命令を下す何かが存在する事を示唆している。そしておそらく白根は、どう聞いてもこの上部組織については口を割らないだらう事は直感的に理解する。

白根の虚言であるといつ可能性も含めて。

とりあえず、なぜバックによく分からぬ組織を持つ田根がオレを探しているのかという非日常的な事実はさておき、ここまでくると一番重要なのは、オレに対し害意があるかどうかだ。

「じゃあ、オレをその……探しているヤツだと断定するには、いつたいどうするんだ？」

「分かりません。検索命令に当たつて私に『えられた情報は少なく、
断定するには不十分です』

どうこう事だよ。

「こつたいたいどうやってオレを判別するんだよ

「監視します

「……じゃあ、もし仮にその探してゐる相手がもしオレだった場合、
オマエはどうするんだ？」

「監視します

白根、昭箭

監視とはまたよく分からぬ答えた。

ある意味で捕縛に近く、ある意味で放置に近い。

「オレを傷つける予定は？」

「ありません

「オレの生活を邪魔する事は？」

「ないように配慮します

配慮、ねえ。

「ここまで白根の話が本当だと仮定したとしても、上からの命令がない限りコイツがオレに牙をむく事はないだろ？」

虚言ならば、少々おつかない美人ストーカーだ。

「まさか、オマエが転校してきたのは、その誰かを探すためか？」

「そうとも言えますが、違うとも言えます」

曖昧な答えだな。

「私は常に移動します。先ほど言つた検索対象を見つけるのが私の至上命題ですが、他にも多くの命題を持ち、様々な場所を訪れるのです」

「……」

何者だ、コイツは。

究極の妄想女か、本物のヤバイ世界の人間か、二つに一つ。隣に座っているマイペースには分かるかもしないが、オレには判断できない。ちなみにそのマイペースはすでにチョコパフェを食べ終え、期間限定スプリングサクラパフェにスプーンを突つこんだところだった。

それにしてもちくしょ、全部オレの問題とはいえ、ちょっとは参加しやがれ。

泣き」とを言つても仕方がない。オレは再び白根の方に視線を戻した。一つ、ため息。

「一応聞くが、オマエ……何者だ？」

「私は白根葵です。以前にも申し上げた筈ですが？」

「名前を聞いてんじゃねえ。親は？ 兄弟は？ 今はどこに住んでいる？」

「親は、生物学的な意味での親は、現在の居場所は不明です。兄弟はいるかもしだせんが私にはわかりません。現在は、桜崎駅付近のマンションで一人暮らしです」

すらすらと答える白根だが、もう満しさ全開だ。

よし、決めた！

オレはコイツと関わらねえ！

「一人暮しなんだ、俺と一緒にだね」

一つ向こうの駅近くのマンションで絶賛一人暮らし中の夙夜がな

ゼかここで参加。

もう「コイツの興味の方向が分かんねえ。もつ3年目の付き合いだ
といふのに、コイツの趣味嗜好も考え方も生き様も、何も見えてこ
ない。

「そうですか。ところで、私はあなたたちの名前が知りたいのです
が」

やつべ、白根も夙夜に負けず劣らずの天然じやないのか。

今更オレたちの名前とか、完全にタイミング間違つてねえ?
待て待て待て、『口先道化師』レベル1のオレごときで、この天

然爆弾を一人も養えるのか?

「俺は香城夙夜。こつちはマモルさん。よろしくね、アオイさん」

「では、改めてよろしくお願ひします」

無表情に向けられた邪氣のない笑顔。

『無関心』の気まぐれな興味は、たまたまオレに寄つて来た、転
校生に向けられた。

夙夜は笑う。怒りはしないが困つた顔もするし、表情豊かだ。問
答無用の天然素材、クラスメイトの受けもいい。運動部でもないく
せに運動神経はよくて、さらに言つと成績もそこそこ。
でも、違う。

とんでもなく目がよくて、とんでもなく耳がいい「コイツは、オレ
たちからは想像もつかないような情報の渦中で生きている。

今だつて、この店の中にある人間と、前を通る人間の会話をすべ
て耳に挟み、さつき先輩の店に並んでいた花の種類から数までべ
てを記憶してしまつていることだろう。もちろん、オレの一瞬一瞬
の表情すら「コイツの脳内に刻まれているはずだ。

その中で生きる「コイツには、特別なモノが出来ない。とんでもな
く丑のいい「コイツにとつては、目の前のクラスメイトも地面を歩く
虫も、同じように見えてしまうから。

だから、特別なモノを意識的に作る。

人間から逸脱しないように。周囲の人間を観察して、真似をする

事で人間であるうとする。

自分から興味を持つ対象が例えば、甘い物だつたり、時に意地つ張りなキツネだつたりする。今回の場合は、たまたま面白そうな転校生。

隣にいるオレに對しては本当に興味があるのかと聞いてみたいが、その答えは恐ろしくて聞けない。

「では、私から質問してもいいですか？」

転校生のアーモンド型の瞳がオレを射抜く。

「……質問内容によつてはな」

「感謝します」

白根は、深々と礼をした後、まつすぐにオレを見て言つた。

「私が持つもう一つの命題の為に、あなたたちの協力を要請します」

「いいよ」

つて、即答すんな、このマイペース野郎！

いまオレはこの転校生と関わるのはよそつと、心の底から決意したところなんだよ！

「感謝します」

白根は艶やかな黒髪を揺らし、軽く会釈した。
ねえ、まさか、ほんとにおれつて不幸体質？

会話の間もずっとパフェを頬張っていた夙夜は、全部食べ終えると、行儀よく手を合わせた。

「じゃあ……やっぱ季節限定は食べなくなるけど、実際食べるとあんまりよくないね」

そんなこと聞いてねえよ。

てかスプリングサクラパフェとかいうセンスゼロの名前を見た時点で分かるだろうが。

まあ、ちなみにオススメの菜の花とボルチーニの柚子胡椒スパゲティはうまかった。やっぱり命名はストレートなのが一番だ。結局ボルチーニが何なのかは分からなかつたがな。

「じゃあ、アオイさんって、マモルさんを探すのとは別にいくつもやんなきやいけない事があるんだねえ」

「私に課せられた命題は現在、優先順位で以て分別されます。まず第一命題が、ある人物の搜索」

「うん、それがマモルさんに似てるんだよね」

「そうです。あなたたちの協力を要請したのは、第一命題です」

「それって、オレたちにも出来る事なのかな?」

「あなたたちだからこそ出来ます」

断言した白根は、さらりと黒髪をかきあげた。

「あなたたちは一年前まで一つの珪素^{シリカ}生命体と行動を共にしていたとお聞きしましたが、それは事実ですか?」

「うん」

「正直に答えるんじゃねえ、このバカ」

「ああ、オレはこのまま何処へ行く。」

「では、私の第一命題を告げます」

「アーモンドの瞳がオレを射抜いた。」

「私の第一命題は、珪素^{シリカ}生命体を見つけ出す事です」

「……？」

思わぬその言葉に、オレは思わず声を失った。

珪素生命体。
シリカ

彼らが定義されたのは今から102年前。山奥で初めて発見された、銃もきかず、刃も通らないという不可思議な生命体だった。

世紀の発見。

調査に次ぐ調査。

そして有機生命体の二ングンたちは、ようやく真実にたどりついた。

それらは、自分たちと同じ有機生命体の手によって創られたモノだった。千木良晴良生物学博士。彼が、たった一人で数万体とも言われる珪素生命体を創り上げたのだった。

炭素ではなく珪素をベースとして組まれた分子で構成される珪素生命体の毛は柔らかそうに見えても金属であり、爪は水晶、瞳は宝石とほぼ同一だ。

生殖能力を持たない珪素生命体は、しかし朽ちない。石と同じ素材でできているから。

彼らが消えるのは、死のプログラム『マイクロヴァース』が発動した時だけ。マイクロヴァースは珪素生命体の軀^{カラダ}を分子レベルに分解し、無に帰す。

死体は残らない。活動を停止した彼らに待つのは、本当の無だ。

その存在に意味はなく、その活動に定義はなく、その生命に目的はない。

ただ在るだけのイキモノ。ただ、淘汰の先に朽ちるのを待つだけのイキモノ。

それが珪素生命体。
シリカ

珪素生命体という言葉が出てきたせいでどうか、夙夜はそこで口を開くのをやめ、少し困った顔をした。
もちろんオレも混乱している。

珪素生命体を探す？ 何のため？

一般的に考えれば、愛玩動物として売り払うための捕獲。
好意的に考えれば、山奥へ逃がすための保護。

他の理由としては、先ほどの事件と関係してくる クラスマイトの萩原は、珪素生命体の爪で裂かれて殺された。夙夜の言う事だから、9割9分9厘間違いない。こいつは、分かつて口を開ざす事はあるが、絶対に嘘はつかない。

「白根、オマエは何のために珪素生命体を探しているんだ？」
「それが私の命題であるからです」

「ああ、ちくしょう、しまった。

「じゃあ質問を変える。オマエは、仮に珪素生命体を見つけたらどうする気だ？」

「保護します」

「保護つて、アイツら野生生物だぞ？ そう簡単に捕まるわけ」
「抵抗した場合、戦闘を許可されています」

「……！」

「これは、妄想か？」

「それとも、本氣か？」

「この無表情の奥に潜むのは、どういった種類の感情だ？」

夙夜は、ようやくここで口を開いた。

「じゃあ、抵抗しなかつたら傷つけたりしないんだね」

「はい。もともと珪素生命体を傷つける事は奨励されていません。

そもそも、法に抵触する行為です

「分かった」

夙夜は、ただ頷いた。

「ありがとうございます。ご協力、感謝します」

黒髪を流して深く礼をした白根の本意が見えない。

本気？ 虚言？ 半分？ すべて？ ビームまで？ 全く？

オレはどうすべきだ。考えろ、考えろ、思考を止めるな、最も妥

当な答えを選びだせ。

「怖い顔しないで、マモルさん」

夙夜の声ではつとした。

「大丈夫だから」

なんて、ノーテンキな言葉。

なんて、ノーテンキな声。

なんて、ノーテンキな笑顔。

それを聞いて、オレの中に余裕が戻つてくるのがわかる。さつきまでぎりぎり追い詰められ詰め込まれていた意識が、解き放たれる。ああもう、考てるのもバカらしい。

言葉は魔法 ほんとですね、先輩。

だからオレは、「イツの傍を離れられないのかもしれない。

「さんきゅ、夙夜」

ぽん、と隣のヤツの肩を叩いて。

「仕方がない、男に一言はないと昔から言つから、オレはオマエに力を貸す。が、勘違いするな、オレは積極的に関わる気はねえ……」

「イツはどうするのか知らねえが

「俺はどうしようかな」

いや、オマエが協力するつて言つたんだからな。

「白根、だから今すぐオレたちがすべき活動内容を簡潔に述べる……それなら得意だろ？」

「了解しました」

オマエは機械か、聞いてみたい。

まるで感情を持たない作業機械のような口調は、珪素生命体より

ずっと人間から遠い位置にあるようだ。

「あなたたちは、ただ、少し気を付けていただければいいのです。

珪素生命体の姿がないか、痕跡はないか、ほんの少し気を付けてい

シリカ

てください。もし発見したなら、私に報告していただきたいのです
「それだけでいいのか？」

「はい。あなたたちは以前、珪素生命体と接触しています。先ほど
あなたがおっしゃったように、彼らとの接触はそう容易ではありません。
せん。おそらく、あなたたちは適合者」

「コンフィ？」

「珪素生命体との『ミコニケーション』を苦なく行う素質を持つた者
を私たちはそう呼んでいます」

「……」

やべえ、やっぱ白根の相手するのはすっごく嫌かも。
どこまでいってるんだ。この転校生。

「……まあ、いいだろ？」

いちいち突っ込んでたら始まらねえし、終わらねえ。
深刻にとらえても仕方ねえし、考えたつてワカラネエ。
「ご協力、感謝します」

そう言つた白根は唇の端をあげて 微笑した。

「イツの笑顔なんて初めて見たんじやねえの？」

笑顔つてほどのもんじやないけど。

なかなか笑わねえのはあの銀色の意地つ張りキッネと同じかよ、
くだらねえ。ヤマザクラの花言葉が『あなたに微笑む』だと言つた
のは、隣に座つたマイペース野郎だつたか？

「じゃ、話はこれで終わりだな」

ちくしょう、いろんなことを思い出しちまつたじやねえか。
イライラする。

目の前の「ツップ」の水を全部飲みほして、勘定をひつたくろうとした瞬間、凄まじい速度で横から手が伸びてきた。

「ありがとうございます。コレ、は、私の話を聞いて下さったお礼
です」

勘定を奪い取つた白根は、有無を言わぬ口調で言い切つた。

憤然と煮え切らない感情を抱えて店を出た。

毎、少し過ぎ。日が落ちるまではまだ間がある。平日にしては高校生の姿が多く見るストリート。楽しそうに買い物をする同級生たち。

この平和な光景は、萩原の死で『えられたモノ。

ああ、イライラする。

「なあ、夙夜。本当に、この街に珪素生命体がいるのか？」
シリカ

「いるよ」

一瞬の躊躇もなく即答した夙夜は、全く悪びれた様子がない。ああ、当たり前すぎてイライラする。

「いつから？」

「んー、半月前くらいかな？」

半月前。

卒業式。

サクラの下の、銀色の毛並み。

「そうか、あれは見間違いじゃなかつたのか。下る。

永久に続くかのような騒がしい坂を、駅に向かつて下つて行く。

「夙夜、オマエはどう思つんだ？」

「何が？」

「何がだらうな。

萩原の事？ 珪素生命体のこと？ 事件の真相？ それとも白根の事？
シリカ

分からぬ。何かが複雑に絡んでいる気がする。

夙夜の言つ事に嘘はない。きっと、萩原を殺したのは水晶の爪で、また、梨鈴以外の珪素生命体がこの街にはいるのだろう。

その因果関係を口に出す事などあり得ないし、梨鈴を知るオレはそうあるはずがないと思っている。

では、白根は何のために探している？ オレの話は置いておくとして、なぜ水晶の爪を持つモノを追う？

「じゃあ聞くが、白根の言つ事は眞実か？」

「うん、嘘は、言つてない」

「やうか

もしかするとオレは、いろいろな事を覚悟した方がいい。
白根の言つ事がマジですべて眞実だった場合、たぶんオレみたいな平凡な高校生には対応もしきれないようなコトが待つている。

もう、今日は帰つて寝る事にしよう。

オレは固く心に誓つて、駅への道をさらに足を速めて下つて行った。

揺らめいて、煌めいて、銀色で、ふわふわと、最後に笑つて。
それでも、オレには何も出来なかつた。

なあ、夙夜。

オマエに見える世界がオレにも見えていたら、アイツを救えたかな？

真つ暗な部屋の中でベッドに横たわり、オレは暗闇を見つめていた。

先輩にもらつたイベリスの花が、じんわりと発光しているかのように闇に浮かび上がつていて。

今でも目の前に投影されているのは血に濡れたクラスメイトの姿だつた。眠れば忘れるものではないし、それ以前に……眠れない。けれども、多くの事が一日のうちに在り過ぎたせいか、意識が分散して、萩原の死で抉られた傷がほんの少しだけ薄れていた。

代わりに、多すぎる出来事がオレの脳内を支配して……眠れない。水晶の爪で、喉を裂かれて死んだ『才女』萩原加奈子。

再び街に現れた珪素生命体。

転校生、白根葵の探し人。

オレにはまだ分からぬ。

いや、普通なら簡単だ。珪素生命体が萩原を殺した シリカ キューピー・ディー 証明終了。

しかし、他の珪素生命体を知るオレにはどうしても信じられない。

彼らが人を傷つけるとは思えないのだ。

これは感情的な問題。そして、理論的な問題。

珪素生命体には、人を傷つける理由がない。

解決しないシーソー論理、もう一個なにか証拠があればどちらか

に傾くと言つのに、オレの中にはもう一つのピースが足りない。
足りない。

足りない。

教えてくれと誰かに頼む事は簡単だが、難解だ。

誰に聞く？ 何と聞く？

何よりオレは、夙夜以外の人間に何かを問つ事を嫌悪している。
最期の笑顔と絶対的切断面が、目の前をちらついて離れない。
闇に目を凝らす。

幻影は消えない。

笑顔が消えない。

惨劇が消えない。

疑問が消えない。

ああ、気持ち悪い。

何もかもを無に帰すマイクロ・ヴァース。

シリカ
珪素生命体を最初に創った博士の意図は知れない。何しろ、世間一般的に彼らの存在が明らかになつたとき、すでに博士は故人だつたから。一人で数万体のイキモノを作り上げた博士は、誰にも胸中を語る事無くこの世を去つた。

『異属』を見つけたら消せ、というたつた一つの命令を彼らに与え、他には何の制約もなく、何百年も朽ちる事無い軀^{カラダ}と人間を模した思考を持ったイキモノとして形作つた。

彼らはただ存在し、『異属』を見つけては排除し、緩やかな時の中で淘汰していく。

なぜ排除の命令を与えたのか。

博士はマイクロ・ヴァースというプログラムにどんな願いを込めたのか。

その先に在るのが永遠なのか、それとも消滅なのか。

オレも、死ぬ時は何も残さずに消えたいよ。

もうダメだ。こんな気分で寝られるわけがねえ。

オレは、とうとうベッドから起き上がり、寝巻用のスウェットにフードパーカーをはおると、夜中のコンビニまで散歩する事にした。

隣の部屋で寝ている大学生の姉も、下の階で寝ている両親も疲労困憊で家に辿り着いたオレに対して、察して何も言わなかつた家族。

誰一人起こさないよにしながら、そつと家を出た。

何もかもを、忘れたかつた。

それでもモノガタリはオレの周囲を巻き込んで　いや、正確に言つならば、オレは最初から関わつてない。うまいことオレを巻き込まず、周囲だけで起きていた。オレの周囲の日常は、常日頃から非日常の体現なのだ。

事件の中心にいながらにして完全なる部外者であったオレは、裏腹に、現実に一番近かつた。

行きつく先は、終焉、奈落、流浪に流転、カタマコトシヤコ変幻自在と都合主義と、自我の塊の集で。

一気に収束していく結末に、オレなんかが、一介の『口先道化師』が入り込む隙なんてどこにもなかつた。

オレは傍観者で、名前だけ主人公の部外者。

何故かオレの周囲に集まる、人並み外れた有機生命体の二ングンを見守るだけ。

『絶対的切断面』

『水晶の爪』

『無表情美人』

『名付け親』

『無関心の災厄』

これだけ役者がそろえれば十分だろう。

幕間劇は終了で、ここから本番、見逃すなれ。

リストにオレの名前は入れないでくれよ。

何しろオレは口先道化師、見守ることしかできないのさ。

冬は終わつたとはいえ、スウェットにパークーで出てきたのはちつとばかりまずかつたか。冬と違つて刺すような寒さはないが、春先の夜風はぶるりと震えるほどにひんやり冷たい。

パークーのポケットに手を突つ込むと、忘れていたしわくちゃの1000円札が出てきてラッキーな気分を味わえた。

これだけでも、寒い中出てきたかいがあるつてもんだ オレつてばなんて小市民。

車も走らぬ午前、片側一車線の歩道もない道をJEDの街頭頼りに駆け足でコンビニへ向かう。

人が少ないのは、桜崎高校で起きた事件がよつやく街全体に浸透したせいだろう。

高校の生徒が喉をかつ切られて殺された。
それだけで、外出しない理由としては十分だ。

夙夜が一発で見抜いた珪素生命体シリカがどうの、水晶の爪がどうのつて事に、警察もそろそろ気づいているはずだが、いつたいどういった対応をするのか、オレには見当もつかなかつた。

そして、明日からの自分がいつたいどうしていいのかも、見当がつかなかつた。

まあ、当面の予定としちゃ、コンビニに到着してまず肉まんだな。それから、始業式と同時に発売だつたはずの、読み損ねた雑誌にでも一通り目を通すか。

「あーさぶつ」

順調な行程ならば、コンビニまで10分ほどだつたはずだ。
しかしながら、オレはどうしても不幸体質らしい。

「……不良少年か？」

道の反対側、街灯の傍に、小さな人影を見つけてオレは思わず足を停めた。

別に何を注意する気もないが、この寒い中あんな事件があつたあと、こんな所に一人とは、怪しむ理由に事欠かない まあ、それはオレにも言えることなのだが。

が、次の瞬間、アカリ 灯を反射した銀色に、オレは愕然とした。

銀色の毛並みの尻尾がゆあんと揺れる。そして銀色の髪から飛び出した銀色の耳。

そこに立っていたのは、まぎれもない珪素生命体シリカだ。

待て待て待て、今回の事件に珪素生命体シリカが関わってるかもしだいと言つたのは夙夜で、ソイツを探していたのは白根だ。関係ないオレの目の前にその張本人らしきイキモノがいるのはいつたいどういう了見だ？

と、いう言葉を飲み込んで、ついでに固睡も飲み込んで、オレは薄ぼんやりとした街灯の下に佇む人影を凝視した。

「……有機生命体」

ガラスを弾いた様な澄んだ声が珪素生命体シリカの喉から漏れた。

見た目はフツウの少年、14・5歳といったところ。フツウじゃないのは、見事な銀色の髪と、その髪から覗く銀色の耳、そして古典的和服の尻のあたりから銀色の長い尾が生えているところ。

あれは、ネコ少年だ。

保護対象である珪素生命体シリカが愛玩用に捕獲されて問題になるのも納得、サファイアのように美しい蒼の瞳が、訝るいぶかしようにオレを貫いていた。

「ネコ少年に関しては特別な思い出があるのだが、思い出したい事ではない。」

「有機生命体だ」

笑わないのは彼らの標準装備なのだろうか そう言つ意味では、白根はニンゲンより彼らに近いのかもしない。

「この時間なら、ダイジョウブだと思ったのに 逃げない。」

「この珪素生命体は、人間を恐れていない。

「しかも、キミはボクを見て逃げない」

いや、こう見えてオレは、心の中で猛ダッシュしてここから逃げてるからね。

夙夜一つ、助けてくれーーー！」

が、銀の毛並みの彼らを扱う事に長けたアイツは、この場にいな
い。

オレしかいない。

ちくしょう、どうしたらいいんだ と、足りない頭をフル回転させた拳句、オレはこの珪素生命体との繋がりを保つことにした。切れてしまつた縁は戻らなくなる可能性が高いので、オレが頑張るしかないだろ？

「やあ、こんにちは、珪素生命体の少年」

まるでそのへんの野良猫にするように、手を差し伸べてみる。

デジヤ・ヴ。

唐突な既視感に襲われたオレは、記憶の底を探り、その答えを手に入れた。

ああ、そうか。

これは2年前、オレたちが最初に邂逅した珪素生命体、キツネ少女との出逢いと同じ。彼女の時、夙夜はこうやって最初に手を差し伸べたのだ。まるで、敵意がないことを示すかのように。

自然と同じ行動をしている自分を不思議に思いながらも、ネコ少年の耳がびくんと動いたのを見逃さなかつた。

オレに興味が向いた。

「ここにちは、有機生命体のお兄さん」

尻尾がゆらゆらと左右に揺れている。

酔いそうなリズムが、街灯を反射した。

「オマエ、逃げないのか？」

「それはこっちの台詞だよ、お兄さん」

生意気そうな口調も彼らの標準装備か？

オレは一步ずつ、ネコ少年に近づいていった。

足が少し震える もし萩原のように一瞬で喉を裂かれて死ぬの

なら、それもいい。

「以前にオマエと似たような知り合いがいてな、馴れてんだ」

そう言つと、ネコ少年は首を傾げた。

「それって、ボクの『異属』？」

「ああ、そうだ。もういなけどな。一年前に別の『異属』と闘つて、消えた」

「ふうん、そう。でも、もう一人いるよね、こい、『異属』。昨日、会つたし」

「？！」

もう一人？！

「このネコ少年以外にも、この街にまだ珪素生命体がいるのか？！
「へんな場所だね。あんまり有機生命体の近くにくる予定はなかつたんだけど、気がついたらここに来ちゃつてた。まるで、何かが呼んでたみたいだ」

「そうだな、オレもそれは不思議だと思つぜ」

「本当だよね。ボクもそれが不思議なんだよ」

何の変哲もないこの街に、この短期間で珪素生命体が3体、もしかすると4体。

これが異常事態だつてことは、警察でも探偵でも研究者でも何でもないオレにだつて分かる。

「なあ、オマエ……名前はあるか？」

「名前？」

やつぱりか。

このまま別れてしまえば、オレとコイツのつながりが切れる。白根に知らせるかどうかはまた別問題として、手札はすべて手中に残しておくんんだ。

だから、次に会う約束を取り付ける。

「名前、つけてやるよ」

「ホント?」

「ぴん、としつぽが立つ。
やつぱり、分かりやすい。」

梨鈴も名前を喜び、はしゃいだのを覚えている。

「ただ、オレは名前を付けるのに向いてないからな。名前を付けるのが得意なオレの友達と会わせてやるよ」

「やつた!」

尻尾と耳が感情を表す。顔は笑つていなくて、コイツらの感情はすぐ分かる。

「ボク、山にいるから。あんまり明るい所に降りるのは危ないから、待つてる」

「ああ、じゃあ、ヤマザクラ、分かるか?」

「うん、わかるよ」

「そこで待つてろ」

「わかつた!」

ぴょん、と飛び上がったネコ少年は、すぐそこへのブロック塀に飛び乗つた。

一跳びでこれだ、珪素シリカ生命体の運動能力は言わずとも理解できよう。

「待つてるよ!」

四足で塀に登り、尻尾を振つて。

ほら、きっとコイツは人間を傷つけたりなんかしやしない。

心の片隅に安堵を覚え、オレも塀に向かってひらひらと手を振つた時だった。

尻尾を振りながら塀の上を歩いていたネコ少年が、ふいにこいつを睨みつけた。

「?!

えつ、何、ここで突然の攻撃スイツチオン?!

「『異属』」

そう呟いたネコは、暗闇にその身を躍らせた。

動けないでいるオレを軽々飛び越え、その後ろの影に飛びかかっていったのだ。

きいん、と背後で金属音。

ヤバい。

振り向けばさつと珪素シリカ生命体同士の戦いが勃発しているところだろづ。

銀色の毛並みが一つ、ぶつかっては離れ、互いを互いで傷つけていく一年前の光景がありありと蘇つて、オレは総毛だつた。

「やめ 」

やめる、と言おうとしたオレの言葉は、最後まで続かなかつた。何しろ、振り向いたオレの目に飛び込んできたのは 水晶の爪を振りかざして闖つネコ少年と、転校してきた黒髪の美女だつたのだから。

— 悪魔の証明『probatio diabolica』、なんて言葉がオレの脳裏を過ぎる。

この時点を持つて、一連の事件は完全にオレの理解の範疇を超えた。

どう見ても有機生命体に見える白根と、どう見ても珪素生命体に見える少年。

なぜ二人が闘っている？

ネコ少年が先ほど言った、『異属』は白根の事なのか？
だとすると、白根は人間ではないのか？

いつたい

キン、と甲高い金属音がして、ネコ少年の尾が傷ついた。
白根が持つのは、珪素生命体シリカが持つのと同じ、『水晶の爪』。

血の滴らぬ傷口に、一年前の記憶が蘇る。

ヤマザクラ、キツネ、髪、『異属』、笑顔。

笑顔

また、オレには何も出来ないのか……？

「……めろ」

ふつふつと沸き上がる何か。

それは、沸騰石なしの実験のように、次の瞬間突沸した。

「やめる！ ソレは『異属』なんかじゃねえ！」

オレの大声で、びくりとするネコ。

サファイアのような蒼がオレをみた。硝子玉のように感情ない、美しい瞳。

「やめる」

オレの言葉で、ネコは一步一歩と後ずさりし、そして、何も言わずに夜の闇へと身をひるがえして去つていった。

ああ、やつちました。

アイツは明日、ヤマザクラの元に来てくれるだろ？

先輩と夙夜に会わせてやる事はできるだろ？

もう少しだけ、アイツとの縁を繋ぎ止める事は可能だろ？

「困りました」

白根の声が背後から響いた。

ホンモノ 真実の人間は、なぜか水晶の爪を持ち、この場に現れ、ホンモノ 真実の珪素生命体の少年を混乱させた。

でもコイツは、『異属』なんかじゃない。

「あなたに協力を要請する際、私の行動を妨げない事を了承していただくのを忘れていました」

ゆっくりと振り向いたオレの目に、街灯の下、制服のまま佇む白根の姿が目にに入る。

オレと同じ制服、見慣れた桜崎高校の女子ブレザーが、全く別世界の召し物に見えた。

しかしながら、白根の指に装着されている武器はオレにも見覚えがある。

あれは、珪素生命体だけが持つ筈の『水晶の爪』。

LEDの街灯に照らされて、プリズムのようにきらきらと輝いていた。

どくん、と心臓の鼓動一つ。

喉を裂かれた萩原の顔が想起する。

「どうやら、あなたは違ったようです。それが今、分かりました。あなたは私の探すモノではなく、強い極性をもつ適合者」

静まり返った夜の坂道に響く、透明な声の主は白根だ。

「……は？」

何だ？ 白根はいつたい何を言つている？

オマエは珪素生命体を保護するんじゃなかつたのか？ なぜ、オマエは何の躊躇もなくアイツに武器を向けた？

「また、白根。それより、オマエのその『爪』は」

「これは、私に与えられた武器です。珪素生命体との戦闘を考慮し、

「与えられたものです」

珪素生命体と同じ武器を『与えられた

オレは、その瞬間觀念し

た。

オレの勘によると、残念ながら、白根の言葉はすべて本気だったらしい。おそらく、その後ろには何かしらのボスが控えている。新規生命体関係、おそらく違法ぎりぎり、戦闘も辞さない物騒な集団。

この白根の洗脳つぶりから見ると、頭の方も相当キレるらしい。恐怖が膨れ上がる。

水晶の爪を納めた白根は、オレに向かって頭を下げた。

「ここまで巻き込んでしまったのは私の責任です。それ相応の償いはさせていただきます」

淡々と、静々と、肅々と。

足りない。
足りない。

足りない。
足りない。

足りない。

オレは下つ腹に力を込め、震えだしそうになる全身を押された。
「じゃあ白根、その償いつての、『情報』という形でオレに渡してくれないか？」

声が震える。

「情報ですか……いいでしょ？」

「逃げんなよ」

挑発的な言葉は、きっと白根にとつて何の意味もない。

それでも、聞きたかった。

オレの中に芽生えた、経験則に基づく予感を確かめるため。

「オマエがオレを探し人と見誤った理由を教えてくれ」

「それは」

「探し人に関しては秘則だ、ってんだろ？ それなら、余計な事は言わなくていい。オマエがなぜオレと間違えたのかを簡潔に説明しろ。それなら、オレに対する過失の説明であって、オマエの言う『

『検索対象』の事を話すわけじゃなくなる。被害者に對して過失の弁明と説明をするのは、加害者の義務だぜ?』

「そうですが、

「オマエの秘則事項は、『検索対象』の事だ。オレについての事じやないし、オマエの失敗談を口止めされるわけでもない……まあ、間違えた事を恥と感じて口を噤むなら止めないが、さつきオマエは『償つ』って言つたわけだからな。それなりの説明はしてもいいだ?

「……」

白根は、少しの間迷つたようだつた。

もちろんそれは、沈黙から判断しただけであつて、断じて白根の表情が変化したというわけではない。

「わかりました。誰にも話さないと、約束してください」

よし、オチた。

口先上等、今のオレには情報が必要だ。

「私は、あなたの顔を見たわけではありませんし、名を知つていたわけでもありません。私に与えられた情報は、ただ、『珪素生命体を破壊できるモノ』だという事」

「珪素生命体を破壊できるモノ?」

「はい。私は一年前、この街に迷い込んだ珪素生命体を追つていました」

一年前。

梨鈴。『異属』。破壊。衝動。そしてマイクロヴァース

ああ、分かつた。

オレには白根の探しているモノがわかつてしまつた。

「しかし、その珪素生命体は、何者かによつて破壊されました」

よく知つてゐるよ。

オレはその現場にいたからな。

「そして私は今回、再び珪素生命体を追つてここへやつてきました。

そして、第一命題を得たのです」

「……」

「聞き込みの結果、一年前までここにいた珪素生命体は、あなたに一番懷いていたという情報を得ました」

まるで箇条書きのような報告だ。

オレが口を挟む隙もねえ。

そして聞き込みでオレに対象を絞るなど、ステーカーもいいところだぜ、全く。

「ですから、私はあなたがそうではないかと思ったのです。申し訳ありませんでした。知っている人間に似ていたというのは、虚言です」

「ああ、まつたくもう、ふざけんなよ、マジで。オレの嫌な予感つてのは当たるんだ。

「私が探しているのは、珪素生命体を破壊できる『ケモノ』です」

残念ながら、白根の探している相手は、オレじゃなかつたらしい。そりやあそуд、オレなんて探して監視したって、何の得にもなりはしない。

もじでかい組織が探して監視するとすれば、その相手はオレじゃなく、オレの同級生。

「人の身でありながらうちにケモノを宿す規格外のイキモノ。それが、私の第一命題です」

その瞬間、オレは思った。

きっと、世界は夙夜を放つておかない。

オレなんかにはどうする事も出来なくなる時がいつかやってくるいや、すでにオレには手を出す隙も口を挟む隙もないのかもしれない。

そうだ、だつてオレには何も出来やしない。萩原が死んだ時だつて、梨鈴が消えた時だつて。

ちくしょう、そんなこと、分かつて。最初からオレが凡人だつてことなんて、分かつて。

何故わざわざオレの傷を抉るような事をするんだ。

燃え尽きにも似た脱力感、虚無感、無力感。
諦めと切望のはざまでもがく、滑稽な道化師。

オレは『口先道化師』 モノガタリの、蚊帳の外。

もう一度現実を突き付けられ、オレは肩を震わせた。
困つて困つて、どうにもリアクションが取れなくなつた時、人間
つてのは笑うように出来るで。

「はは……そ、うか、そ、うか」

それでも、いくつかの出来事の謎は解けた。

足りない情報は、あと一つ。

真実に傾くシーソーに乗せる、最後の一つ。

その一つをえ、見つければ。

「あばよ、白根。オレはもう一度とオマエの顔なんぞ見たくねえ」

オレは決意を握りしめ、転校生に背を向けた。

萩原の葬式の日は、サクラ満開の暖かで穏やかな日だった。オレと夙夜は、桜崎高校からそう遠くない、観光客もちらほら見られる、そこそこ有名だという大きな寺で行われる葬式に向かっていた。

高校生のフォーマル、制服に身を包んで。

式はすでに始まっていた。

何の事はない。オレの隣のこのマイペース同級生が寝坊しやがつたというただそれだけの理由だ。

会場だけじゃなく、その周囲までしめやかな雰囲気に包まれていて、会場に近づくにつれ、夙夜への嫌みを連発していたオレも自然と静かになつた。

少し視線を巡らせれば警察の姿が見え隠れしている、葬送と似つかわしくないこの光景、見ていると鬱になりそうだ。

「あ、柊。香城も来たか」

「遅かつたね」

会場に到着したオレたちを、他のクラスメイトが出迎えた。皆一様に制服姿で、まるで朝、登校して教室に入ったかのような錯覚に襲われる。

いつもまとめ役だった萩原がいない。不思議な感覚だった。

普段なら絶対に我慢できない筈の長い読経が、オレの中を沈めていく。部屋全体を包み込んで、すすり泣く声も沈鬱な空気も全部とりこんで。

淡々と、静々と、イベント肅々と。

昨日から理不尽な事件の連続で煮詰まっていたオレの頭は、少し

ずつ整理されつつある。

あと一つだけ足りないピース。

線香の匂いが、現実に意識を引き戻す。

美人つてわけじゃないけど女の子らしくて、明朗快活、文武両道の女子高生。萩原の遺影を瞼に焼きつけて、オレはしばらく目を閉じる。

萩原、オマエ、なぜあの場にいてしまったんだ？

オマエも何か関係があつたりしたのか？

あんな処にいなければ、あんな事にはならなかつたのに。

あとひとつは、オレが必ず見つけて見せるから。

萩原の弔い合戦、なんていうとカッコいいが、そんなもんじゃない。

特別仲良しだつたつてわけじゃない。

でも、アイツは『オ女』だつたから、ちょっとズレているオレたち文芸部の事さえフツウに見守つていてくれた。

真実を求める動機なんて、それだけで十分じゃないか。

これはオレの意地。『口先道化師』『部外者』『傍観者』『名前だけ主人公』　その他もうもう、多くの名を抱えたオレの精いっぱいの抵抗。

世界の方がオレを選んでくれないのなら、オレが世界を選んでやるよ。

そう思つた瞬間、オレの目の前からあれだけ消えてくれなかつた血濡れの裏庭が、ふつと消えた。

呪文のように響く低い読経に紛れて、オレは隣のマイペース男に声をかけた。

「なあ、夙夜」

「なあに？　マモルさん」

「少しだけ、手助けしてくれないか？」

オレが、そちら側の世界に飛び込む手助けを。

そんなオレの言外のコトバは伝わったのだろうか。

「いいよ」

いつものノーテンキな笑顔。

「さんきゅ」

笑顔。

ありがとな。

ところがじつこい、気持ちが高揚したつて、体がついて来るわけじゃない。

何時間もの正座に耐えたオレの足は、とっくに限界を越えていた。やべえ、これ、オレの足じゃないみたいだ。

と、見渡せば同じように崩れ落ちるクラスメイトたち。

「みんな大丈夫？」

既に立ちあがつて全員を見渡しているのは香城夙夜。

この野郎、一人涼しい顔しやがつて！

「何でお前は平気なんだよ、香城！」

「んー、俺、田舎育ちだから？」

「知るかボケえ！」

高校生たちのうめき声（死を悼んで発している）が堂内に響き渡った。

なんとかシビレ地獄を脱出して寺を出たオレは、とりあえず夙夜を連れて先輩の働く店に向かっていた。

昨日の晩の、珪素生命体との約束を守るため。

桜崎通り裏手の、花屋『アルカンシエル』 フランス語で『虹

』という意味。

からんからん、と軽快な音を立てて扉を開くと、聞き慣れた声が迎えてくれた。

「いらっしゃいませです」

ぐるりと振り向いた先輩は、前回と違う衣装で花の中に立つてい

た。

今回のコンセプトは、『風車の少女』。赤いベストと長めのスカート、白いエプロンも眩しく、足元は木靴、とまあティードレスまで凝っている。

まるで操り人形が生命を得て動き出したかのようだ。

くつく、と笑うと先輩はむつとした顔をした。

「人を見て笑うなんて、マモルちゃんは失礼なのです

「すみません、先輩が、あまりに……」

「あまりに、なんですか？」

「……可愛らしかったので」

オレの答えがお気に召したのか、先輩は機嫌を直してもう一度花の水やりを始めた。銀色の如雨露から、きらきらと水の霧が注いでいく。

「元気そうでよかったです。昨日のマモルちゃんは今にも死にそうだったのですよ？」

「すみません、ご心配おかけしました」

「ふふふ、で、今日はいつたいどうしたのです？ 元気な姿を見せに来てくれたわけじやなさそりですよ？」

「ええ、そうです」

先輩は、こう見えて鋭い。

そうじやなきや、オレや夙夜にあだ名をつけたりなんかできない

が。

「先輩、珪素生命体に興味、ありませんか？」

ひととおりオレの話を聞いた先輩は、にこりと笑った。

「ワタシも行くです。連れて行つてほしいのです。その子に会つてみたいのです」

そしてエプロンだけを外すと、奥に向かつて声をかけた。

「カスミさん！ ワタシ、ちょっとだけ外出したいのです」

すると奥から、妙齢の女性の力ない声が返ってきた。

「んー、構わんよ、私は今日、本職が休みだから」「でゅつくつしよつと思つてたところだ」

「ありがとうなのです」

「何より、可愛いスマイルの頬みを私が断るわけないだろ?」

きゅつきゅ、とスニーカーの音。

奥から、声の通り、妙齢の女性が現れた。

少し眠そうな瞼、ラフなシャツ姿で七分のデニムにスニーカーと
いう、さっぱりした印象の装い。真ん中で分けた長い亞麻色の髪が
さらりと揺れた。正統派ではないが、人目をひく美人だ。年齢は2
0代半ばと言つたところか。

すらりとした長身は、オレより高いかもしれない……いや、オレ
まだ成長期だから。まだ伸びるからね。

どうやらこのヒトが花屋の店長と思われる。

するとそのまますつきりした美人は、オレの隣のヤツを見て肩を竦め
た。

「おお、夙夜、お前も来てたのか」「
は?

何? オマエも知り合いか?

「へへ、久しぶり」

「何だよ、元気なら連絡くらい寄越せよ! 心配するだろ!」

「でも、叔母さん、忙しいと思って」

「そんな余計な気遣いはいらん。お前の生活費を払つてるのは誰だ
と思ってやがる」

大股で歩いてきて夙夜の鼻をつまんだ彼女は、やはりオレより背
が高い。

いや、ちょっとだけだぜ? 2センチ、4センチ……いや、5セ
ンチくらいかな。

ヒールだつてんなら分かるが、スニーカー。好意的に見積もつて
も170後半は……

「じぶじぶ見るな、少年。私がデカイから気にしてるんだろ?」

「あ、いや、そんな事は」

「いやいやいいんだ、馴れてるから」

ひらひらと手を振る店長。指長え。ピアノとか得意そう。つてかおい、フツたのはそっちだろ。

ヤベえ。

オレの中の警鐘が鳴る。

悪いが、すでに天然を相当数抱え込んでるんだ。これ以上オレは突つ込めないぞ？

「が、このメンバー」という事は、お前が『マモルさん』か

「あ、オレ、柊護ひいらぎです。初めて」

「やはりそうか。そうじやないかと思つたんだ」

うんうん、と勝手に頷く女性。

何者だ。

そのさつぱりした美人店長は、同じくらいの身長の夙夜の肩に手を置き、にやりと笑う。

「私は香城珂清こうじょう かすみ」この、香城夙夜の叔母にして、養い主だ」

ああ。

この話聞かなさ具合と、あとそのやる気なさげな田も、並ぶとちよつと似てるな。

とりあえずなぜ夙夜の叔母が先輩の花屋の店長で、夙夜の養い親なのがは不明だが。そして年齢が少々若すぎる氣もするが、女性に年を聞くなどという失礼を犯すわけにもいかない。

「お前の事は夙夜とスミレからよく聞いてる」

ああ、出来る事なら関わりたくねえ。

しかし、この状況で関わるな、というのは不可能。

「……お一人には、お世話になつてます」

ああ、どこへ行く、オレの日常。

オレ自身を置いて行かないでくれ。

一年以上前、この場所で、ぼこぼこに殴られて顔を腫らしたアイツは言った。

『マモルさん、ヤマザクラの花言葉って知ってる?』

『……知るか』

『あなたに微笑む、だよ』

だから何だ、ともオレには言えず、珪素生命体のキツネ少女が最後にくつきりと焼き付けていった脳裏の笑顔に、胸を締め付けられていた。

一瞬フラッシュバックした過去を拭い去り、オレはもう一度、散つてしまつたヤマザクラを見上げた。

高校の裏にある山の中、ぽつりと佇むヤマザクラは、一年前までオレたちと共に在つた梨鈴という名の珪素生命体の墓標。

オレたちに懐いていたキツネ少女の梨鈴は、突然この街に現れた『異属』と戦つたが、負けてマイクロヴァースが発動し、消えた。 ゆうやく傷つかずに出せるよくなつたその記憶は、今も新しい。

桜崎高校の所在地は、都内とはいえ3方を山に囲まれた半盆地で、高校から15分も歩けばすぐ登山道にぶち当たる。

その中でも、標高も低く登りやすい、定年後のハイキングコースよろしく高校の裏に聳えるのが『神楽山』だ。春は桜、秋は紅葉、その合間にも新緑や雪景色を楽しませてくれる、地元密着型の山、よく地元の小学校校歌に登場するアレだ。

かくいうオレの母校の校歌にも登場する『雲に聳える神楽山

生徒見守り微笑んで』なんてな。

オレはゆうくとヤマザクラの樹の下に座つた。そこは、花びら

で桃色の絨毯になっていた。

少し、太陽が傾いて空に橙色が見え始めている。

昨日から絞られ続けたオレの口^口は豆腐の搾りかす^{くらす}にぼろぼろだぜ。

しかし、思い出の残るこの場所は、ほんの少しだけオレを落ちつけてくれた　夙夜も先輩も、きっとそれを知っている。

「ふふ、ここに来るのは久しぶりなのです」

オランダ衣装でくるくると野原を駆ける少女　なぜだろう、年上だというのにとっても微笑ましい。

あ、オレ今、現役男子高校生にあるまじき遠い目になつてねえ？

暖かい風が吹き抜ける場所。

梨鈴の眠る場所。

「あ、来たよ」

夙夜の声がする。

そして、ソイツが指さした先には、昨日の晩に邂逅したネコ少年が立つっていた。

暗闇では分かりにくかったが、少々生意氣^{シリカ}そうな目鼻立ち、すんなりと細くのびた手足、しなやかなネコの珪素生命体だ。

「来てくれたんだね、お兄さん」

「ああ。約束しただろ？」

肩を竦めると、ネコ少年は恐る恐る広場の中心に出てきた。

一番近くにいた先輩が、その少年の元に駆けつけて、よく梨鈴にしていたようにぐりぐりと頭を撫でまわした。

突然の出来事に反応できなかつたのか、少年は硬直するが、先輩はそんな事お構いなしだ。

「ふふふ、可愛いのです。おめめが蒼いのです。綺麗なのです。

明るいお星さまみたいなのです」

「せ、先輩、その子困つてるから……」

「ちょっとだけ、知つてる子に似てるのです」

一瞬。

ぱつりと呟いた先輩は、すぐににこりと笑い、その少年に名前を付けた。

「キミは『シリウス』なのです。おめめの色と一緒になのですか？」
少年は呆然とした。
が、すぐにそれが自分に付けられた名なのだと知り、ぴん、としつぽを立てた。

あ、喜んでる。

「シリウス、か。よろしくね、シリウスくん」

空を向いた尻尾を左右に揺らし、耳を動かしながら、ネコ少年、改めシリウスは夙夜にお愛想し、オレの方に寄ってきた。

いや、間違い。

一足飛びにオレへと襲いかかってきた。

「ぎゃーっ！」

思わず悲鳴をあげて死のタックルを避けたオレに、先輩の不満げな声がかけられる。

「マモルちゃん、シリウスくんの感謝の気持ちを避けちゃダメなのです」

「なん」と言つても、確実にオレ死ぬ！ シリカ珪素生命体のタックルなんて食らつたらオレ、死ぬから！」

先輩相手に敬語を忘れて叫び上げ、オレはシリウスから距離をとつた。

無理無理無理。

オレとシリウスが睨みあう中、夙夜がのんびりとオレに言つ。

「当たる瞬間に、ちょっとだけ急所をずらすんだよ。そしたら死なないから」

「バカ野郎、オマエ、自分の事じやねえからって、しかも当たる瞬間に避けるとか、オレはオマエじやねえんだよ！ そして死なねえからついいわけでもねえ！」

死ななくても大怪我だろうが！ マジで！

そんな様子をくすくすと見守る先輩。

あ、こんな光景、見たことある

油断した次の瞬間、凄まじい重さの珪素シリカ生命体の体がオレの背中に直撃し、オレは、地面と仲良くなつてしまつた。

春の陽気の中、野原でじやれること約一時間。

オレの体力はもう限界。

もう無理、マジ無理というオレの必死の訴えで、帰還が決定した。それには、先輩と夙夜の腹ぐらいも関係しているに違いないのだが。

「ねえ、お兄さん」

「オレは護まもるだ」

「じゃあ、マモル。また、会える?」

シリウスの瞳。

蒼い、蒼い、硝子玉のような感情ない瞳。

「ああ、たまには、遊びに来てやるよ」

「ありがと」

彼らは、笑わなくとも全身で表情を示す。

ほら、今も嬉しそうに尻尾が左右に揺れている。

そうだな、明日も来てやろうかな。

山を下るオレは、言わずとも何かを心に抱いていた。

それは、シリウスに見た梨鈴の面影だつたり、楽しかつた青春の日々 といつには脚色が過ぎるが だつたりした。

あれから一年も経つのか。

初めて感慨深く思い出す事が出来た。

「ワタシ、今度はお花の種を持って行くのです。シリウスくんと一緒に植えるのです」

嬉しそうな先輩の赤いリボンがくるくると風を巻き込んで翻る。

「楽しそうですね、先輩」

「ありがとうございます、マモルちゃん。シリウスくんは、きっといい子なのです」

「また一緒に遊びに行きましょうよ。放課後、迎えに行きますから」「うふふ、いいですねー」

「でもその時は、あの、ピンクのHプロンダレスがいいと思いますよ、オレは」

「そう言つと、先輩はきょとん、と首を傾げた。

「そうなのですか？ でもマモルちゃんがそう言つながらつするのです」

よし、ぐつじょぶオレ。

そんなオレたちの様子を、少し後ろから夙夜が見ている。誰にも聞こえないように、ぽつりと呟いて。

「「めんね」

聞き間違いかと思つたが、それはびつやら夙夜の口から漏れた言葉らしい。

何がだ、と聞き返そつとした時、なぜか、オレたちの田の前に制服を着た警察官が一人、立ちはだかっていた。

待つてくれ、どういう状況だ、コレは。

田の前に警官が一人、どう見ても友好的な関係を築けなさそうだ。一人は若くて背の高い、精悍な印象の警察官。もう一人は、それより少し年上の、やる気なさげなおっさん刑事。ぼさぼさと無精ひげが生えている。

そして、特別刑事ドラマが好きでもないオレでも言われる前に予想できる、言い古された言葉が待つていた。

初めて田にする警察手帳を田の前に突き付けて。

「柊護くんと香城夙夜くんですね？ 桜崎警察の者です。ちょっと署までご同行願えますか」

できればもう少しひねった言葉を使って欲しかったよ、刑事さん

たち。

昔に比べるとかなり視聴率が下がってるという、毎週火曜の刑事ドラマの視聴率を上げるためにもな。

警察署つてのは、もつと汚い所かと思つていた。

駅から徒歩約10分、車で来たから正確な距離は分からぬがそ
のくらいだらう。

想像と全く違う3日前に立てたかのようなピカピカのビルの中に
連行されたオレたちは、想像よりずっと綺麗な、まるで「デザインマ
ンション」の一室かと見紛うような整然とした部屋に通された。

窓枠のデザインセンスがわからぬえ。サンカクとシカクを重ねた
からつて、アートになるわけじやねえだろ。ピカソにでも基礎から
習つて來い。

おお、机の天板もすべすべだ。

でも、なぜ椅子だけがぼろぼろのパイプ椅子？

目の前に座つて資料を広げ始めたのは、さきほどオレたちを連行
した若い刑事だった。

これが噂の取り調べつてヤツだらうか。

「ええと、柊衛くん、と、香城夙夜くん、であつているね」

「はい」

精悍な顔立ちと、子供に媚びるような口調のギャップが気に入ら
ない。声もバリトンなのだから、もつと厳つく喋つてほしこうじ
だ。

ここまで猫なで声が似合わないキャラクターも珍しい。

夙夜は大人しく隣に座つていた。

「先日君たちの高校で起きた事件については、分かつてゐると思う。
クラスメイトである萩原加奈子さんが裏庭で殺害され、その後、死
体が放置された。その現場を写した生徒の携帯写真に、君たちの姿
があつたが、事件現場にいた事は相違ないかな？」

「はい、そうです」

なるべく、感情を出さないように。動搖を悟られなによう。

それはオレのちつぽけなプライド。

葬式で号泣したクラスメイトたちを見て目頭が熱くなつても泣かないよう我慢した時と同じ気分だ。

本当なら、思い出せんならバカ野郎、と怒鳴りつけてやりたいところだつたが、まさかそういうわけにもいかない。何しろ相手は警察官なのだ。オレみたいな一般高校生に太刀打ちできる敵じゃない。「では、その日の出来事を、順を追つて教えてくれないかな?」

「はい」

オレはまるで白根のよつに淡々と、静々と、肅々とその日の出来事を説明していった。

が、現場に辿り着いたあたりで、オレの話は止まった。

「……あ

声が出なくなる。

あの惨劇を言葉に表そうとする、喉が張り付いて、カラカラに乾いて、息が困難になる。

体が伏せて、萩原の顔は空を見て、そして絶対的切断面がオレを見て。

その様子を見て、その刑事はふと調書を書く手をとめた。

「ああ、無理はしなくていい。あの現場を見た生徒さんは、みなそうだったから。柊くん、君はそれに比べるとずいぶんしつかりと話してくれたよ」

みな、という事は、あの場にいた全員が口々に呼ばれてるつて事か。

オレたちが特別つてわけじゃなもんつだ。

「待つてください」

それでも、オレは口に出すべきだらう 口先道化師の名に賭けて。

そして、萩原の死を忘れないために。

「ちゃんと、最後まで話しますから」

微かに震える手を膝の上できゅつと握り拳に。

夙夜の心配そうな顔に横目で気付いている中、オレはゆっくりと話を続けた。

「現場はすでに人だかりでした。でもオレは、その場に到着してすぐ、人と人の頭の間から、萩原の死体を見ました」

フランシュバック。

血。切断面。顔。

今でも鮮明に思い出せる。

「最初に見えたのは首の、切断された部分です。もう全部血が流れ出してて、芝生が赤黒く固まつてて、そのせいなのか、面がくつき見えたんです。オレは生物選択じゃないから詳しくは分かりませんけど、気道だとか、太い血管だとがが切断された断面が丸く見えました。白いものもあつたけど、もしかすると骨かもしれない」

「ああ、気が遠くなりそうだ。」

「人だかりから悲鳴が上がつていました。たぶん、女子生徒が多かつたと思います。やじ馬で駆けつけた生徒です。少しづつ、倒れたりとか、逃げだしたりとかして、そんで、ちょっとずつ人が減つてました。校舎の上の階から写真を撮つてるやつもいたみたいですね。オレたちが写真に写つたとしたら、その時だろうと思います」

キモチワルイ。

「人が減つて、死体がはつきり見えました。死体は、萩原は、体はうつ伏せになつてゐるけど、顔は上を向いてました。うつろな目で、表情で空を見ていました」

キモチワルイ。

「苦しそうじやなかつたから、きつと一瞬で死んだんじゃないでしょうか そんな事、彼女にとつては何の救いにもなりませんけど」

キモチワルイ。

「そのくらいに、やつと教師が大きな白い布を持ってきて、萩原に掛けました。でも、萩原は最後の一瞬までうつろな目で空を見上げてた オレが覚えてるのは、そこまでです」

気持ち悪い。

『どうやらオレは意識を飛ばす事なく最後まで話しきる事が出来たようだ。』

「辛い話をさせてしまったね、ありがとう」

大きく、息を吐く。

まるで何千メートルも全力疾走した後のことだ。全身に汗をびっしょりとかき、固めた両手は膝の上でぶるぶると震えていた。それでも最後まで話し終えた。

一種の安堵がオレを包む。

が、それは次の刑事の言葉で一気につぶされた。

「ところで 君たちは、一年前まで『リリン』という個体識別称を持つ珪素生命体と行動を共にしていたという事を聞いたが、事実かな？」

「……ええ、本当です」

あ、警鐘。

珪素生命体関連は口に出せない、とてもじゃないが警察にバレちゃまずいことばかりしている。

一年前に夙夜が梨鈴を消した『異属』を有機生命体の身でありますから消し去った事。今回の事件に関連する水晶の爪を持つモノを二人知っている事。

それどころか、珪素生命体に名をつけ、友好関係を築いている事。何も話せない。

どれもこれも法に引っかかりかねないし、何より夙夜の能力がバレてしまう。

「一年前まで、という事だが、その後の珪素生命体の行方は？」
「……街にやつてきた『異属』と相打ちになつて、消えました」
「これは用意していた答えだ。」

梨鈴を消した『異属』をここにいる夙夜が消したとは、まさか口が裂けても言えない。

「相打ち、ね。じゃあ、ここ一年、他の珪素生命体との接触は？」

「ありません」

少し、罪悪感。

一瞬だけ白根が警察と共に謀る可能性を疑つたが、その疑いはすぐには消えた。

もしそうなら、容疑者の珪素生命体と慣れ合つておる、それを白根にばつちり目撃されたオレはとつこに逮捕されてるはずだ。

その途端、刑事の目が一気に厳しくなつた。口調も荒くなる。

「本当か？」一度ヤツらに魅入られた人間のもとには、再び珪素生命体が訪れるというが？」

「知りません」

オレがなるべく波風立てないように返答していると、突然夙夜が割り込んできた。

「それって、殺人事件の凶器が『水晶の爪』だから聞いてるの？ だとしたら、もういいよ。だつて俺達はそんな武器、持つてないんだから」

おい、夙夜。それは

その瞬間、前の席に座っていた刑事が持つ鉛筆の芯がぼきつとのすごい音を立てて折れた。飛んだカケラがオレのすぐ横をかすめていく。

「なぜ、それを？」

水晶の爪が凶器。

そう、夙夜にとつては当たり前に分かる事は、一般人にとつて当たり前ではない。

「だつて、俺はマモルさんと一緒に現場を見たんだよ？ だから、知つてもおかしくないでしょ？」

「あの傷が水晶の爪によるものだといつ事は、見て分かる事ではな

い

「分かるものは分かるよ、それは仕方ない。それなら隣の部屋の…

…あ、やっぱ、何でもない」

このタイミングでそれか！

普通聞こえないはずの声を盗み聞くのはやめろって言つてたるだろ…

刑事は頭に血がのぼりかけていたせいで気にしていないようだが、隣に座っているオレはひやひやしている。

「『J』の件に珪素生命体が関係している事は極秘事項だ。お前達は、いつたいどうやって、どこで、その情報を手に入れた?」

おやおや刑事さん。そんな簡単に認めちゃって、いい刑事さんになれないよ。 それだけ動搖するほどの情報だつて事だが。

それはそうだ。珪素生命体（シリカは、有機生命体に無干渉であるから）その自由を保っていたのだ。珪素生命体がニンゲンを傷つけたとなると、政府の対応自体が、大きく変わってしまう可能性がある。

「だから見たから分かるって言つてるんだ」

悪びれた様子のない夙夜は、心の底から本気だ。

理屈ではなく、彼には分かるのだ なぜわかるのだ、と聞かれても、『分からぬニンゲン』にはいくら説明しても無駄らしい。分かるものは分かる。

夙夜はいつでもそう言い張るし、そしてそれは真実なのだろう。

「言え！ 何処で聞いた！」

とうとう声を荒げた刑事にも、しかし夙夜は一歩も引かなかつた。だからさつきからずっとと言つてるのに、どうして聞いてくれないの?」

あれれ、これはもしかして、普段怒らない夙夜が若干イライラしているのでは?

やべえ、珍しいもん見た。

「『J』のガキども……」

最初の猫なで声はどこへやら。完全に化けの皮が剥がれた若い刑事は、がたん、と席を立つた。

その方が似合うよ、刑事さん。

「Jのまま拘束する事も出来るんだぞ?」

「どうやって? オレたちは犯人じゃない」

おおつと、脅しモードですか?

「 というか夙夜くん、今日は見た事無いほどの戦闘モードですねえ。完全傍観者を決め込んだオレは、いつもの立場と逆転して、ノーテンキにコイツを見守る事にした。」

「 もう我慢ならん、お前らを重要参考人として」と、そこまで言いかけた時、こんこん、ヒドアをノックする音がした。

その音で我に返ったのか、刑事は曲がったネクタイを直し、部屋の外へと出て行つた。

「 そこで大人しくしていろ」

分かりやすい捨て台詞を残して、

嵐の去った部屋で、オレは肩を竦めて夙夜を見る。いつの間にか、「イツはいつものぼのぼのモードに戻っていた。

「おい夙夜、どうすんだよ」

「んー、大丈夫じゃない? スミレ先輩が叔母さん呼びに行つたから

「は?」

オレは首を傾げたが、夙夜はにこにこと笑うばかり。

「それよりマモルさん、相手が失礼な時は怒つてもいいんだよ」

「失礼? 何が?」

「ええと、わざとけしかけて辛い話させたり、それで弱つたところに一番重要な質問を持つてきたり」

「……」

ああ、そうだな。

まんまと相手の術中にはまるところだつたよ。

この無関心野郎がオレの為に怒つてくれた……と、一応のところ

喜んでもいいんだろうか。

ちらりと見た夙夜は、いつもと同じようにへらへら笑いながら机に頬杖をついていた。

「あの人があんまりマモルさんを苛めるから、間違えて喋っちゃつたじゃん」

「うわあ、泣きそつなほど嬉しい台詞だが、本気で悲しいのは何故だろ?」

「……バカ野郎、助けなんかいられえよ」

「あ、ひどいなあ」

顔を見合せて笑い合つた時、再び部屋の扉が開いた。憮然とした表情の刑事は、吐き捨てるよつと言い放つた。

「身元引き取り人だ」

そう言つて刑事がいつぱいに開いた扉の向こうから姿を現したのは、他でもない、朝に花屋で初めて会つたばかりの夙夜の叔母、香城珂清じょうかすみその人だつた。

花屋の店長、かつ夙夜の叔母の香城珂清がなぜここに？

見れば、オレたちの話を聞いて頭に血が上つていた若い警官は、

彼女に敬礼をしてゐる。

え、何？ これ、何？

「どういう事ですか？」

「夙夜とお前の身元を引き取りに来たんだよ。感謝しろ。特にそこのごく漬し」

「はーい、ありがとう、叔母さん」

のんびりと返事をした夙夜は、感謝が軽いんだよ、と珂清さんに首をホールドされていた。完全にキマつてゐるらしく、夙夜の口はぱくぱくと動くだけで声は出でていない。

「愁傷さま。そのまま苦しそうな笑顔で成仏しろよ、夙夜。

「でも、何で珂清さんが？ しかも、警官のあの態度……」

オレは、確実に彼女に敬意を払つていてるように見える警官を二つそり指した。

すると。

「ふつふつふ。疑問はもつとも。そう、ある時は花屋『アルカンシエル』の店長、またある時は夙夜の叔母兼養い親、そしてその正体はつ

いや、その古臭い枕詞いりませんよね？

「聞いて驚け！ 私は国家権力だ！」

彼女は自信満々でオレに指を突き付けた。

やつべえ、どつから突つ込んでいいのか分かんねえ。

国家権力はヒトじやねえからイコールで『私』にはつながらねえし、まったく威張るポイントじやねえし、オレの問いに何一つ答えてねえ。

そこでようやく夙夜の首を放して、珂清さんは肩を竦めた。

「まあ、詳しい事は言わんが、私の本職はそこそこの権力を有しているという事だよ、少年」

「はあ……」

腑に落ちないが、まあいいだろう。

とにかく助かった事に変わりはない。

「あー、そうそう。夙夜、お前のクラスメイトがもう一人、隣で拘束されたが、そつちも助けた方がいいか？」

「うーん、でもハラダくんは第一発見者だし、たぶんすごく重要な証言をしてるところだから、もうちょっと待つて」

「……これだからお前が監獄内にいるのは危険なんだ。ここでは他の事件の取り調べなんかもしてるんだから、不用意に聞いた事を口に出すなよ？」

「分かってるよ、叔母さん」

どうやら叔母さんとやら、夙夜の能力について知っているらしい。なんだかほっとした。

夙夜の並はずれた能力を知る人が他にもいて。

「あと少ししたら迎えに行つてあげて。ハラダくん、好きな人が死んじやつたのは自分のせいだつてすごく落ち込んでるから」

「はいはい。叔母使いの荒いガキだな、このヤロウ」

「ごめん。でも、叔母さんにしかできない事なんだ」

その言葉で、珂清さんはし�ょうがないな、肩を竦める。

う、コイツ、天然タラシか。

?

ちょっと待て。今の台詞、思い出せ。

夙夜は今、なんて言った？

『ハラダくん、好きな人が死んじやつたのは自分のせいだつてすごく落ち込んでるから』

自分のせい？

なぜ？

原田が殺したわけでもないのに、『自分のせい』？
何だそれ、どういう事だ？

あ。

かちり。

音を立てて、最後のピースがはまる。
それは『偶然』という名の見えないカケラ。
分からなかつた一つだけ、なぜ萩原は裏庭にいたのか。
傾いたシーソーが一つの真実を指し示す。
ああもう、考へても分からぬはずじやないか。

「……なんて、滑稽な」

もれた台詞すら陳腐だった。

まさかこんな結末。

なんてくだらない結末。

明かす価値もないような、まるで萩原の死をあざ笑うかのような
眞実。

「萩原……」

一瞬で命を絶たれたのがせめてもの救い、だなんて、何の気休め
にもなりやしない。死んでしまえば全部一緒だ。

魂は壊れ、タマシイ軀は朽ちカラダ、後には何も遺さない。

マイクロ、ヴァースに喰われて消える、シリカ珪素生命体と何も変わらな
い。

「どうした？ 少年

突然黙つてしまつたオレに、珂清さんは首を傾げる。

「なるほど、だから『ごめんね』か……」

あの時夙夜が呟いた言葉。

「ごめんね、マモルさん」

もう一度夙夜が呟く。

ああ、やっぱりそうなのか。やっぱり、眞実はそうなのか。

思い描いた何通りかのうちでは、最悪の結末だ。

本当に最悪。

この結末を夙夜が知つてやがつたつて言つのが、もつと本当に最

悪だ 災厄だ。

香城夙夜、18歳男。高校3年生になりたてで18歳つてのは、どうやら一年分、ワケあり。極度の甘党。とくにプリンが好きで、新作のコンビニプリンが出る度に買い込んでは勝手に批評する。知力、体力、一見標準よりちょっと上。弱冠天然、いつもへらへらと気の抜けるような笑顔で人当たりはいい。

その実、五感、いや第六感までズバ抜けて、ケモノ並み。それを誤魔化すために適当な事を言い、会話で自己完結をするのだがそれは全部天然で片づけられる。

『名付け親』枝守スミレは、一目見るなりこのマイペース男にあだ名をつけた。

『無関心の災厄』

それは、無関心が故に引き起こされる災厄。
分かっていても口に出さない。出来る事をしない。
そして、最後に災厄ディザスターを引き起こす、無駄な事件体质。

これは災厄。アイツの無関心がもたらした災厄。

警察署を出れば、すでに空には星が輝いていた。

冬の星座は、あのネコ少年の瞳と同じ色をしたシリウスは見当たらなかつたけれど。

明日仕事だからと先に帰つてしまつた珂清さんを見送つて、オレと夙夜は冷たい春の風に曝された。

「……少しだけ、寄つてもいいか?」

他にはなんの言葉もなかつたというのに、夙夜はにこりと笑つて

承諾してくれた。

13 : 真夜中の校舎のシリウス

キープアウトの黄色いテープもなんのその。オレたちは夜の学校に忍び込んだ。

そして、他には目もくれず、裏庭に向かう。静まり返つて音はなく、新月の晩に光もなく、いくつか設置されているLEDの光を頼りに校庭を横切つて行った。薄い影がオレたちについて来る。

闇夜に浮かび上がるサクラ色は、薄ぼんやりと夜風に揺れて、淡い記憶を刺激した。

裏庭にはあつちにもこつちにもテープが張り巡らされ、昼間の調査の跡を色濃く残していた。見張りの一人もいないのは、ここが学校で部外者立入禁止、桜崎高校の優秀なメインコンピューターが逐一侵入者を監視しているからだろう。

もつとも、生徒であるオレたちにそんな事は関係ない。

萩原が倒れていた辺りにはシートがかけられていて見えなかつたが、夙夜はその場所に静かに手を合わせると、そこから最も近い校舎にゆっくりと歩み寄つた。

何かを確かめるかのように、その壁に手を当てる。

その仕草は、誰かと交信するようにも、誰かに語りかけるようにも見えた。

「……なあ、まさかとは思ひナビ、夙夜、オマエ、最初から分かつてた？」

「うーん、分かんないよ

脱力するような答えを言つた。

オレがどれだけ悩んでこの答えに辿り着いたと思っているのか。「でもね、こここ、こここも、傷がついてる。全部、水晶の爪の傷だよ」

夙夜は校舎の壁を撫でながら答えた。

「それも、一種類。ホンモノと、セモノ。だから、シリウスともう一人いて、二人がここで争った事は分かつた」

「傷を見ただけで、それだけ分かるのか？」

「コイツは^{ホンモノ}真実の化け物か。」

「でも、オレに分かるのはそこまで。それ以上は分かんない」

「あの『偶然ここを萩原が通った』って事も？」

「それはさつき、ハラダくんの話で知った。俺には何にも分かんないよ、マモルさん。俺、マモルさんみたいにいろいろと考えるのは苦手なんだ」

「……そうか」

「コイツは、『事実』は分かつてもそれ以上は分からない。ここで一人が争った事が分かつていて、ここで萩原が死んでいたって事が分かつても、『その争いに巻き込まれた萩原がシリウスの爪にかかつて死んでしまった』とは分からぬ。だからこそ、災厄を引き起こす。」

「偶然、だつたんだよ。萩原は、あの時間に、偶然ここを通つてしまつたんだ」

原田が校舎の裏に呼び出していたから。

ああもう、何でその日に限つて。しかもそんな古典的な。

そして、その日に限つて白根と遭遇したシリウスが、ここで激闘を繰り広げた。

偶然に通りかかった、萩原を巻き込んで。

「シリウスはだつて、^{タンソ}有機生命体自体に興味があるわけじゃねえ。ただ、オレたちに興味を持つただけだ。だから、興味のなかつた萩原を傷つけたことに、何の感慨もなかつたし、特別な事でもなかつた」

たとえそのつけた傷が萩原の命を奪つていたとしても。

なんてこつた。

意図して^{イタズラ}悪戯に奪つた命でなく、本能と衝動から奪つた命でもな

く。

ただ、爪が通る直線状にいただけという理由で裂かれた萩原は、そのまま死んでしまった。きっと、アイツは、殺してしまった事にだつて気づいていないだろ。う。

ニンゲンつて、本当に弱い生き物だ。

一年前、梨鈴を消滅させた珪素生命体は言った。

『珪素生命体は有機生命体に干渉しないって言われるけど、それは、興味ないだけだよ』

あの言葉が、今になつて蘇る。

興味ない。

珪素生命体は有機生命体に興味がない。

「興味がない　か」

シリウス。

オレは、もしかするとこれからオマエを傷つけるかもしれない。

オレは、もしかするとすでにオマエに傷つけられたのかもしれない。

い。

珪素生命体には有機生命体を傷つける理由がない。

珪素生命体には有機生命体を傷つけない理由がない。

まるで、不可思議な言葉遊び。

最後にはまつたピースが『偶然』だなんて、オレには予想もつかなかつたよ。

なあ、シリウス。

お前はオレたちに興味があるだけで、『有機生命体』に興味があるわけじゃないんだよな？

「マモルさん、悲しまないで。オレたちにまどりよつもなかつた事だよ」

「……そうだけどよ」

気づきたくなかった真実。

知らないでいたかつた現実。

オレはいつたい、次にどんな顔をしてシリウスに会えばいい？

それなのに。

オレの嫌な予感つてのは、大体あたるんだ。

野性のケモノ並みの勘を持つ夙夜ほどじやないにしても。

「マモル」

ここにいるはずのない、いてはいけないはずの少年の声がする。ある筈のない銀色の毛並みが夜風に靡いてい。

少しだけぶるりと背筋が冷えたのは、冷たい風のせいだけじゃない。

「よかつた、ここに来たら会える気がしたんだ」

「……シリウス」

芝生を乗り越えて駆けてきたのは、有機生命体用のセキュリティには反応しない、珪素生命体の姿だった。

「どうしても会いたくて、降りてきたんだ」

「……シリウス」

オレは、これから何度もこの名を繰り返すのだろう。しかし、オレは知ってしまった。

「どうしたの？」マモル

「いくつか、質問してもいいか？」

「いいよ」

何の疑いもなく頷くシリウス。

「オマエ、最初に『異属』と会った場所、覚えてるか？」

「覚えてるって、ここだよ。この建物の、ちょうど二〇。シュクヤが立ってるあたりだね」

「その時、オマエは戦つたよな？」

「うん、そんで、『異属』も応戦してきたよ。マモルだって見たでしょ？」『異属』が僕に爪を向けたの

「ああ、そうだな」

しかしあれは『異属』ではなく水晶の爪を持つだけの人間だった。

「じゃあ、シリウス」

「なあに、マモル」

シリウスは、名を呼ばれること自体が嬉しくて仕方がないらしい。ずっと、尻尾が左右に揺れている。

「ここで戦った時に、有機生命体がいたの、覚えているか？」

「あ、うん、一人いたみたい」

「オマエは、その有機生命体を傷つけなかつたか？」

「うーん、よく覚えてないな……有機生命体って、柔らかいから傷つけてもよく分かんないんだ」

「……そうか」

目を伏せたオレに、いつたい何を感じ取ったのか、シリウスは首を傾げた。

ずっと左右に振れていた尻尾がぴん、と停止する。

「マモルさん」

夙夜が言う。

「初めて会った時に、シリウスから ニンゲンの血の匂いがした」

「ああ、そうか」

夙夜 やっぱりオマエは、最初から分かっていたんだな。

萩原はシリウスの爪にかかつて死んだこと。

「シリウス。よく聞け。実は、ここで、オレの友達が昨日、死んだんだ」

「そうなの？」

首を傾げたシリウスは、本当に無垢な猫のようだ。

オレは少しばかり胸が痛んだ。

「オマエの爪も、髪も、体全部、オレたち有機生命体にとつては命を奪う狂氣なんだ。ほら、お前の尻尾」

オレは、長い銀色の毛並みの尾を手に取る。

びくりとしたところを見ると、梨鈴と同じようにシリウスもきっと尻尾を触られる事を極端に嫌う。

見た目にそぐわぬ無機質な手触り。

オレは、その尾をぎゅっと握りしめた。

鋭い痛みが走り、オレの手からは赤い雫が滴り落ちた。

「マモルが、傷ついた」

「ああ、そうだ。オマエとオレでは、造りが全然違つんだ」
ぱつと放した尻尾が、ぴんと天を指した。

動搖するように、小刻みに震えている。

「もしかして、気がつかない間にボクはマモルのお友達を壊しちゃつたの？」

「……そうだ」

胸が痛い。

珪素生命体は、『異属』と認識したモノを見ると本能に逆らえない。

オレたちと一年間共に過ごした梨鈴でさえそつだつた。

この場所で白根と相対したシリウスは、刻み込まれたその衝動に勝てず、白根に襲いかかり、そして偶然通りかかった萩原をその爪で傷つけた。

「マモルは悲しかったの？」

「ああ、悲しかった。友達だつたから。オマエはオレや夙夜が消えたら悲しいか？」

「うん、悲しいよ」

「そうだ」

オレは、傷ついていない方の掌で、シリウスの髪を撫でた。

珪素ベースの生命体、その感触はまるで石を撫でたかのように冷たかつた。

「だから、シリウスはその事を覚えておいてほしいんだ。それで、これからは有機生命体に触れる時は気を付けるようにするんだ。わかつたか？」

こんな事、本当はしちゃいけないのかもしない。
たつたこれだけの注意にとどめるなんて、オレは指導者としちゃ失格だ。

萩原の遺族とか、原田とか、警察とか、いろんな人たちがこの事件の為に働いているのに、オレの感情一つだけでこんな風に片付け

ようとする事自体が傲慢だ。

ただの高校生でしかないのに、ただ偶然シリウスと出会つただけなのに。

オレなんかが。

「でも、この話は、絶対に他のヤツにするなよ。オマエとオレと、夙夜だけの秘密だ」

世間に知らせるわけにはいかないだろ。何しろ、コレが世間に知られれば、珪素生命体全体の存亡^{シジカ}が危うくなる。

「うん、わかった……」

シリウスの尻尾が地面につくほど垂れた。

「ふふ、マモルさんはきっといいお父さんになるよ」

「バカ野郎、そんな事言われて喜ぶ高校生がいるか

思わず力が抜ける。

事故とはいえ、有機生命体^{タツシ}に無干渉であるからこそ^{シリカ}の自由を保つていた珪素生命体に対するニンゲンの対応が、大きく変わつてしまふ可能性がある。

そんな大事、オレたちみたいな高校生が片づけていい問題じゃない。

でも、もし日本の警察が、あの若い刑事さんとかが優秀だつたら、警察に夙夜と同じだけの情報を手に入れるだけの科学力が現在あるとしたら、おそらく露見してしまつだろ。けれど、少なくともオレたちが自発的に話す事だけはない。

ところが、夙夜は困つたように笑つていた。

「マモルさん

「何だ?」

まだ何か問題があるのか?

「あのねえ、アオイさんがこいつに向かつてるんだ

「……はい?」

「」の上、白根がここへ乱入する?

やめてくれ、收拾つかなくなるから。出来ればこのシリアスでプリ解決しました的なまま終わりたいから。

まあ、オレのやな予感てのは当たる……以下略。

それから夙夜、向かってるじゃなく、もう到着してると言つて欲しかつた。

「現時点を持つて私の第一命題は保護、から確保、に書き換えられました」

夜の校舎に凛と響く無表情美人の声。

「武力で以て、珪素生命体を拘束します」

艶やかな黒髪を新月の夜風に靡かせて、白根が佇んでいた。

「香城夙夜さん」

白根の声が低く、響いた。

靡く黒髪。白磁の肌、すつきりとしたアーモンドの瞳がオレと夙夜を交互に見やる。

闇のなかに浮かび上がったその姿に、オレは意味もなく釘付けになつた。

「あなただつたのですね」

ぞくりと襲う、恐怖。

何？ いつたい「コイツは、何だ？

表情なく、ロボット作業機械のように話し、シリカ珪素生命体と同じ武器を持つ。

「本日をもつて、私に『えられた第一命題と第一命題は、真である事が証明されます』

ヤバい。

いや、ヤバいなんてもんじゃねえ。

ホントのホンキでロボット作業機械だ。

夙夜の無関心と対になる 無表情。

厭いのだ、何も。そこには、無い。感情と呼ばれるモノが、一切

ナイ。

「白根……シリウスを連れて行く気か」

「それが私の命題です」

「シリウスは、連れて行かれた先でどうなる？」

「すでに人間を殺めてしまつた珪素生命体に下される決断です。私には断言できません。ただし、私たちは珪素生命体を保護するモノです」

「保護つてオマエ」

オレはそこで言葉を失つた。

白根は答えない。

夙夜も答えない。

シリウスも答えない。

暗闇の闇夜に夜風、風音、音無、無表情。

「白根葵。オマエは本当に……何者なんだ？」

「それは、秘則です」

オレの喉から呻きが漏れた。

「オマエ、人間じゃないのか？」

以前、同じ台詞を言った事がある。

その台詞は、先輩に陳腐だと一蹴されてしまったのだが、オレには学習能力がないのか、再びその過ちを繰り返してしまった。

ああ、分かつてるよ。オレみたいな凡人には、そんな陳腐な言葉でオマエたちを表す事しかできないんだ。そっち側の世界にいるオマエたちに、どうしても近づけないんだ。

「ホント、真実にそう思いますか？」

何の迷いもなく漆黒の瞳で射抜かれて、オレは言葉を失った。

あの日、夙夜が言ったコトバ。

シラネアオイの花言葉 『完全な美』。

それは、外見の美しさなんかじゃない。

「私は白根葵。その名と命題以外には、何も与えられていません。しかし、私が通常生殖によつて生み出された有機生命体のヒトである事は間違ひありません」

完全に統制されたその思考の事だ。

破壊された完全。美。奈落、回転、流転、その先に待つのは破滅

ああ、この転校生も、夙夜と同じだ。

オレとは全く別次元の世界で生きている。

彼女の言葉は、まるで魔法か呪文のようにオレに暗示をかけてその場に張り付けてしまった。

少し離れた所にいる、夙夜とシリウスに視線が移動する。

「邪魔をしないでください」

水晶の爪が、光る。

その瞬間、シリウスの空気が豹変した。

くたりと垂れていた尻尾がぴんと立つ。全身の毛が逆立つて、耳がぴんと立ち、みるみる瞳孔が開く。

そうか、あの爪が『異属』と勘違いさせる契機^{キイ}となるのだ。

一年前のあの時と同じ。

オレたちと共に在る珪素^{シリカ}生命体はどうしてもこの結末を望むのか？

「夙夜」

オレには、何も出来ない。

だから、助けてくれ。

視線でそう伝えると、夙夜はやつぱり困ったように笑つた。

「マモルさんって、たまにオレに向かって無茶言つよね」

「一年前は無理だった。でもそれは、オマエが最初から傍観者に徹したからだ」『無関心の災厄』

「その名前、俺はあんまり好きじゃないんだけどね」

「だから今回は オレはシリウスを失いたくないんだ」

頼むから。

もう一度繰り返さないために、オレのコトバが何かに役立つのな

ら。

その瞬間、背後で水晶の爪がぶつかり合つ音がした。

「マモルさん」

その光景が見えているはずの夙夜は、じつとオレの背後に視線を据えていた。

二人の戦いの一瞬一瞬を見守る様に。

「マモルさんの願いは、何？」

オレの願い？ 願いなんて高尚なもんじゃねえよ。

それは。

「シリウスとまだ遊び足りない」

「おーけい、マモルさん。任せて」

夙夜はそう言つと、一年前と同じようにネクタイを外してオレに

渡した。

この瞬間が一番オレの無力を感じる。

「今度は、何とかしてみせるから。見ててね、マモルさん」「だからオマエ、その台詞……天然タラシか。

夙夜は手に武器を持っているようには見えない。

いつたいどうやつてあの二人を止めるというのだろう オレが無茶を言つたのがそもそも原因なのだが。

夙夜は、とんとん、とその場でいくらかステップを踏み、じつと二人のぶつかり合いを見た。

珪素生命体であるシリウスは当然のことながら、それを相手にする白根の動きも尋常じやない。まるで、特撮映画でも見ているかのように、重力を感じさせず、軽々と空中で爪を交えている。が、夙夜は一人の着地を狙つて地を蹴つた。

着地の瞬間、白根の手首を目にもとまらぬ動きで捻りあげ、その手に握られた水晶の爪でシリウスの攻撃を受け止めた。

がきん、と凄まじい音。

硬度7の水晶同士がぶつかり合つた。

夙夜は白根の手首をきめたまま、大きく横に廻いだ。
「ちよつとごめんねつ」

振り回された白根の細い肢体が宙に舞つた。

その手に握られていた水晶の爪の一つは、夙夜の手の内へ。

「シユクヤ、邪魔しないで！」

「そう言つわけにもいかなくてねつ」

攻撃の軌道に水晶の爪が閃いて、シリウスは大きくバランスを崩した。

そのまま芝生へ倒れ込み、夙夜はそのまま抑えつける。

そこへ、残つた爪を振りかざした白根が襲いかかった。

刹那、時が止まつたかと思つた。

「武器を納めて」

夙夜は強い口調で言った。

それも、片手でシリウスを抑え込み、もう一方の手で白根の手首を握りしめながら。

穏やかな口調でも、夙夜の内に秘められた刃が鋭利に研がれているのが感じ取れるほどの力強さだった。

とんでもない力　　アイツの能力は、底なし。

いや違う、アイツは力の使い方がうまいだけだ。質量差のある相手の力をうまく利用して抑え込んでいるだけ。そういう力の遣い方が、本能的に分かっている。

白根も悟ったのか、すっと彼女の武器を退いた。

15 : ケモノの弦きと道化師の雄叫び

静けさの戻つた校舎の裏。

闇夜に薄暗い灯^{アカリ}で、全員が浮かび上がる。

「『ケモノ』、そして柊護さん。現在の状況を知つてください」

荒い息で、白根はオレたちに告げた。

「国家組織は既に珪素生命体の事を嗅ぎつけました。このままではこの個体は近日中に捕縛されるでしょう」

オレは答えなかつた。

「收拾が非常に難しい事態に陥つています。私たちで収められるかは、予測不能です」

私たち 白根の背後にある組織。

「ですから、私がすべての責任で以て片付けます」

「どういう事だ？」

「その珪素生命体を捕獲し、すべての元凶は私であったという事実に書き換えを」

「なつ……」

それは、白根があの殺人事件の犯人として投降するという意味だ。

「そうしたら、どうなるの？」

シリウスの純粹な興味。

白根は、腕の傷を押さえながら淡々と答えた。

「人間の社会には、規則が存在します。そして、罪を犯したモノはその規則に沿つて裁かれます。犯した罪と同じだけのモノを返されるでしょう」

「同じだけ……？」

首を傾げるシリウス。

「じゃあ、ボクも消えたらいいって事？」

「……！」

純粹が故、率直。実直。

そして、ケモノに近い素質を持ちながら人間の思考を与えられてしまつたアンバランスなこのネコに、消滅への恐怖はなかつた。

そんな結論は誰も望んでいないのに。

「違います。私は爪で切断されてしまつた彼女を即死と判断し、すぐさまその場を離れました。そして、男子生徒が発見し、あの騒ぎとなりました」

白根の声が静かに響く。

「彼女を殺したのは私です」

「でも、ボクが『犯した罪』は、そういうモノなんでしょう？」

罪。

そうだ、シリウスが萩原の命を奪つた事は事実。言葉を失つてしまつたオレを見て、聰いネコの子は理解する。「それに、ボクの存在で、ボクの仲間は同じ日に遭つ」

「そんな事はない、と言えない。」

何しろ、シリウスの言葉は**真実**だから。

もし彼が国家組織の方に捕まれば、確実に**珪素**生命体全体に危害が及ぶ事は否めない。

「だから」

でも、駄目だ。

その言葉は、朽ちない筈のオマエに引導を渡す最後の刃。

「ボクが消えればいい」

「やめる、シリウス！」

それ以上の事を口にしたら。

それ以上の事を望んでしまえば。
ホントウ
真実に消えてしまうから。

朽ちない珪素生命体を唯一無に帰すマイクロヴァースが、シリウスの思いに反応して発動してしまつ。

「やめろっ……だつてオマエ、まだ名前もらつて少ししか経つてないだろうがつ」

ついさつき。

ほんのつこわっこ、あのヤマザクラの下で先輩がつけた名前。
「名前つてのはばびに呼ばれるために在るんだよ！ オレはせつか
くのオマエの名前をもつと呼んでやりたいんだよ！」

一年前の懺悔。

アイツにも、もつと笑わせてやりたかった。

「オレはオマエとして楽しいよ。だから、もつと一緒にいたいと思
う。それはシリウス、オマエも同じじゃないのか？ こんな時間に
学校まで来たのは、そのせいじゃないのか？」

「ボクもマモルさんとして楽しかったよ。だから、マモルさんが悲
しむのは嫌なんだ」

「だから」

何故伝わらない。

オマエが消えるとオレはまた悲しむのだという事がビックリして分か
らないんだ。

「でも、ボクは名前を持つ『ニンゲン』を消した。マモルは悲しか
つたんでしょう？ それにこのままだと、ボクと同じ珪素生命体が
大変な目に遭うんでしよう？」

「誰かを消したから自分も消えるなんて、そんなめちゃくちゃな論
理があるか！ 罪滅ぼしつてんなら生きて償え！」

「償つつて、ナニ？ 生きるつて、ナニ？」

蒼い硝子玉。

そこに感情はない。

いつもひんと立っていた尻尾は、地面にぐつたりと横たわってい
た。

「ボクはマモルを悲しませた。仲間にも、酷い事をした。でも、ボ
クさえ消えれば問題ないんでしょ？だからボクは消えるよ」

ダメだ、もう。間に合わない。

言葉が出ない。

「さよなら、マモル」

「シリウス！ 消えるな。オマエまで消えたら、オレはまた悲

しむだろうが！ またオレにあんな……」「

血。切断面。顔。

銀色。消滅。ヤマザクラ。笑顔

「またあんな辛い思いなんて」

我儘な言葉だ。

こんな我儘じや、きつとシリウスには届かない。

「行くなつ、シリウス！」

まだ名前を呼び足りない。

これからもつと、何度も何度も呼んでいくはずの名前だったのに。

「シリウス！」

ああ、シリウスのこの笑顔は、とてもよく覚えてい。

きつとそれは、笑わない珪素生命体が唯一赦された笑顔なんだろ

う。

ねえ、先輩。

『コトバは魔法だ』なんて、本当はウソなんだろ？

口先でイキモノの生死を変えられるのなら、この世に死なんてモノは存在しねえ。

たつた一言、『レイズ』といつだけで蘇る、そんな御伽話は、創りモノの中にしか存在しないんだ。『光あれ』つて出来る眩い世界なんて、空想の産物なんだ。

王子様のキスで生き返るつてのなら、オレは何度だつてそのヤマザクラの幹に口付けてやるよ。

バカ野郎。

オレには、いつだつて何も出来はしない。

どんな言葉を使つたつて、どんなに考えを巡らせたつて結局、梨鈴もシリウスも救えないから。

本当にコトバが魔法だというのなら、オレにシリウスを救う魔法を教えてくれ。

今なら薄っぺらいオレのプライドなんか全部捨てて、本当のバカ野郎はオレだと認めたうえで、それを知るヤツの前に跪いてもいいから

でも、オレの祈りは届かなかった。もしくは、届いても間に合わなかつた。

オレたちの見ている田の前で、シリウスはやつぱりサクラより星空より美しい最後の笑顔を残し、美しい銀色の光を放ちながら。風の中に、まぎれて、何もかもを、無に帰した。

静かな校舎に、オレの絶叫が響き渡つた。

そして静かな、悲しげな夙夜の懺悔が夜風に響いた。

「ごめん、マモルさん」

オマエが謝ることじゃない。

そう言いたかつたのに、オレの喉からは呻き声しかでなかつた。

まるで悲哀を助長するかのように、サクラの花が散る。真夜中の学校で、消えていった一つを導くように。

悲哀を呼び込んだ完全なる美の罪を問つかのように。また何も救えなかつた道化師をあざ笑うかのように。そして、無関心に災厄を導いた本人を責めるかのように。

これですべてが終わつた事だと告げるかのように。

白根は何も言わなかつたし、もちろん夙夜も黙つていた。

あの二人が黙つているのだから、オレが口を開くわけにはいかない。

だから、シリウスだけがなかつたことになった。

そして、一番後ろの端の席は学校が再開してもずっと空席のままで、オレたちの教室からは一人の人間が減り、転校生の白根が増えた。

犯人がこの世から消えてしまった以上、警察の捜査に何の意味もない。

あれから平和に学校生活を送つてているオレの与り知らぬうち、いつの間にかフェイドアウトした事件は、きっと、たぶん、夙夜の叔母だとかいう国家権力によつて鎮静されたのではないかと邪推する。時折、街の中での若い刑事を見る事もあるが、特に何も言つてこないところからも、珂清さんの権力の強さは伺い知れる。いつたい何者だ。

本当に?

本当になかつた事になるのか?

何もかもを無に帰すマイクロヴァース。

一人ですべてを作り出したつていう千木良博士、それに夙夜。アイツが無関心なことは分かつている。

今回だつて、気まぐれでオレに手を貸し、気まぐれで転校生に興味のあるフリをし、過去の梨鈴への興味からシリウスにも興味を示した。

人間である事を継続するためにはあやつて行動しただけだ。

アイツの中に、特別なんてものはない。

分かつていいけれども、オレもその無関心の対象で、あのネコもその対象で、実はキツネも先輩も白根も、アイツの周囲に存在する何もかもがそうだっていうことに、オレは悲しんでもいいだろ？

どうして悲しいのかはわからねえ。

でも、もし昔の偉いヒトが言つてたように『好きの反対が無関心』だつていうんなら、オレはいつちょまえにアイツに好かれたがつてることなんだろう。

そんなこと、認めたくもねえよ。

オレがアイツに興味を持つていて、さらにアイツがオレに興味を持つ事を望んでいるだなんて、滑稽にもほどがある。

ああ、本当に滑稽だ。

この話を先輩にしたら、いつもよりぐぐぐと笑ってくれるだろうか。

ああ、なんてくだらねえ。

桜崎通りの一本奥の道、ひつそり佇む花屋『アルカンシエル』。オレはその花屋の扉を開けた。

「いらっしゃいませ、ですう」

相変わらず可愛らしい声がオレを出迎えてくれる。

「あっ、マモルちゃんです！」

花の国のアリスと化した文芸部の先輩は、嬉しそうにオレに向かつてたたつと駆け寄ると、いつものように腰の辺りにタックルをきました。

い、いてえ……いつもにもまして威力が……！

「元気そうでよかったです」

にこにこと笑う先輩に、オレは文句を引っ込めてため息一つ。そして、つられて笑い返しながら告げた。

「笑われにきました

事の顛末と事件の真相を話し終えたオレは、全身を酷い脱力感に襲われていた。

「悲しいのです。シリウスくん、消えちゃつたのです」

梨鈴の時と同じ言葉を口にして、先輩は悲しそうな顔をした。

「すみません。今度も、オレには何も出来なかつた」

オレも、一年前とまるで同じ台詞を吐いた。

「先輩。コトバは魔法になるなんて、ウソなんですか？ オレの言葉じゃ、シリウスを救えないんですか？ 萩原も、梨鈴も、シリウスも、誰ひとり救えないんですか？」

とんでもなく我儘な言葉を続けたオレに、先輩は優しく笑う。

「それは違うのです」

「何も違わない！」

ここでこうやつて声を荒げられるのは、オレが先輩に頼りきつて、甘えているからだと分かつている。

それでも、胸の底にたまつた思いを吐き出したかった。

「夙夜は、チカラ、アイツは何でも出来る。でも、何もしようとしてない。あれだけの能力を持つていながら、活用する事を知らない」

「それはアノ子が『無関心の災厄』だからなのです。何もしようとしてないのではなく、何も出来ないので」「

分かつてる。

アイツがああやつて生きているのがわざとじゃない事、それはずっと隣にいたオレが一番よく分かつている。

「それでもオレにはなんの力もない……！」

「違うのですよ、マモルちゃん。マモルちゃんが認めようとしないだけなのです。マモルちゃんの中にケモノはいないのですが、その代わり、ケモノの対局のモノが在るのです」

先輩。

オレにはそんな力はないよ。

「『道化師』さんは、ケモノを従える事も出来るのです。そして、みんなを喜ばせる事も出来るのです。コトバは魔法、それはウソではないのです。でも、ホントウでもないのです。コトバを武器にして相手を傷つけるのは簡単ですが、それを治すのはとっても難しいのです。躰カラダについた傷も同じです。そして、そのコトバの使い方を決めるのは、マモルちゃん自身なのです」

誰ひとりだつて救えやしないよ。

「シユクヤくんはすでに『無関心の災厄』として完成してますです。でも、マモルちゃんは『口先道化師』としては未熟なのです」先輩は、細い腕をいっぱいに伸ばして、オレの頭を抱き込んだ。それに合わせて腰を折ると、ふわりと甘い匂いがした。

これは、花の匂いだ。

「もつといっぱい悩んで、いっぱい勉強して、マモルちゃんは素敵な魔法使いになつてほしいのです。それがワタシとシユクヤくんのお願いなのです」

ああもう、そんな事言わないでよ、先輩。

そんなこと言われたら、またオレは過ちを繰り返しちまう。そつち側の世界に入りたいと、思つてしまつ。

「先輩……」

「なんですか？」

「オレ……もつと、アイツに近づきたい。アイツだけじゃない、白根や、先輩の近くに行きたい」

オレははつきりと自覚した。

自分がだけがモノガタリに関われない事が悔しいと。アイツらと同じ目線に立つて、様々な出来事を迎えてやりたいと。

「ワタシも、そう思いますですよ？」

そう言つて、優しい花の国のアリスはオレの頭をそつと撫でた。

やべえ。ほんといやべえ。

これ、奥で珂清さんが聞いてたとかいう最低のオチはねえよな？

さつきまでのカツ『悪い姿はなかつた事にしたいのだが。

先輩に弱音を吐きまくつて、励まされまくつて、ようやく落ち着いたオレは、ばつ悪く鼻の頭なんて擦りながら、誤魔化すように言った。

『『イベリス』の花言葉、オレも調べたんですよ』

『そうなのですか？』

『はい』

珍しく図書館へ足を運んで、そしてペラペラとページをめくつて。でも、それだけの手間をかけた価値はあつた。

『イベリスの花言葉は『無関心』。それから、もう一つ『心を惹きつける』。一つ、あつたんですね』

『ふふふ、正解なのです』

につこりと笑つた先輩は、また花を差し出した。

『これは正解のご褒美です』

今度の花は鉢植えで、薄い花弁が大きくぱつと開いているのが印象的だつた。淡い桃色の花は、先輩の来ているユーフォームと同じ色。

ああ、そうだ。夙夜の叔母の国家権力でもある花屋の店長にコスチュームのお礼を言い忘れていたのだった。

まあ、それは今度でいいか。

『また来ますよ、先輩』

『いつでも待つてます』

店を出て、花の鉢を抱え、学校に向かつて坂を登る。

仕方がない、もう一回図書館まで足を運ぶか。

それとも、ヤマザクラとシラネアオイの花言葉を即答したマイペースなオレの同級生は、この花の花言葉も知つてゐるだろつか？

・・・ プリムラとイベリスとシリネア オイ

花屋を出て、まっすぐ高校の文芸部部室へ直行し、その扉を開けたオレは愕然とした。

そして、たつぱり30秒は部屋の中を見渡した後、窓際でのんびりと外の様子を眺めている同級生に向かつて指を突き付けた。

「おい、そこのマイペース」

「ダメだよ、マモルさん、ヒトを指でさしたりしねや。それに俺の名前、マイペースじゃない」

「うるさい、それは初対面で同じ事をしつけた、白根にも言ってやれ」

そう言つて、オレは部屋の中央あたりでパイプ椅子に座つて読書する黒髪の美少女にもう一度指を突き付ける。

「現在の文芸部員が2人つて事を考慮すると、この『無表情美人』を部室に招き入れたのはどう考へてもオマエしかいないんだが、その予測は間違つてないよな?」

「うん、そうだねえ」

「そうなのかよ。

しかも白根は、シリウスの身代りに捕まるのではないかと思つていたのだが。

「白根、警察はいいのか警察は」

「その提案は承認されませんでした」

「ああそうですか。」

オレの心配はなんだったんですか。

「気が遠くなりそうなオレに、夙夜は首をかしげながら尋ねた。

「ところでその花はどうしたの?」

「あ、これか? 先輩がくれたんだ」

「『プリムラ』だね。花言葉は『運命をひらぐ』『運命をひらぐ』

運命をひらぐ。

図らうも、オレがそっち側の世界を選んだよつた。

まさか先輩、マジで夙夜と共謀してオレを『口先道化師』として育てようとしてるんじゃないだろうな？

「私の命題はすべて証明され、第一命題は『ケモノの監視』となりました。これから、私はここに滞在する事になります」

「よかつたねえ、マモルさん。一人部員が増えたよ！」

「ああ、そうだな。春だからな。

新入生勧誘……もうめんどうだからいいか。始業式からの『口タッグ』で、どの部活も勧誘なんて忘れてるし。

こうしてほとんど活動していない文芸部の部室からは、卒業式に一人減り、始業式に一人増えた。

まさかコレで大団円、なんて、言わねえだろつた。

オレはぜつたいに認めねえぞ。

でも、オレはこんなめんぢくさいヤツは嫌いじゃねえ。

それに、こんなめんぢくさい毎日も、オレ自身も、もうひりんこの世界も嫌いじゃねえよ？

たとえばそこで生じるモノガタリに、オレが付け入るすきなぞ残されていなくとも。

運命をひらく

世界がオレを選ばないなら、オレが世界を選ぶから。

了

・・・ プリムラとイベリスとシラネアオイ（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました！

この作品は、企画参加作品です。「春・花小説」で検索すると、素晴らしい作家陣の春の花と花言葉にまつわる作品を読む事が出来ますので、ぜひどうぞ。

自分の作品はもう最後の方は花も花言葉も全く関係なくなつていたのですが……（――）
本当にすみません。

しかもやたら回りくどいだけで結局なんにも解決してない。読んでる方は相当イライラされたと思いますが、書いてる方も実は四苦八苦でした。

つまく云えられるよつ、もつと精進していきたいと思います。

それぞれのイメージフラワーとしては、

- ・ 杣 護 プリムラ 「運命をひらく」
- ・ 香城 風夜 イベリス 「無関心／心を惹きつける」
- ・ 白根 葵 シラネアオイ 「完全な美」
- ・ 梨鈴 ヤマザクラ 「あなたに微笑む」

でした。

わけが分からぬ感じに絡んでいた過去話は「無関心の災厄 ヤマザクラ」として掲載しています。もしよろしければそちらもどうぞ。

ほとんど謎が明らかになつてないので（アオイさんの組織とか…）

…）また続きを連載してしまつかもしれません。その時はまたぜひよひしきお願いします。

拙い作品ではございましたが、感想などいただけると非常に喜びます。

本当にありがとうございました！

4/8追記

続編「無関心の災厄」
[ワレモコトハ](http://www.floword.net/)（<http://www.floword.net/>）を掲載しました。

もしよひしきければどうぞ。

参考サイト

「花言葉」Floword <http://www.floword.net/>
「串間洋蘭」<http://www.kushimao-orchid.co.jp/>

おまけ1 「登場人物紹介」（前書き）

ここからはおまけです。多少次回のネタバレ。

おまけ1 「登場人物紹介」

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

この先はおまけとして、簡単な登場人物紹介と次回作の予告を載せました。
よろしければどうぞ。

*****「無関心の災厄」 登場人物紹介

【柊 護】（ひいらぎ まもる）／マモルさん、マモルちゃん
17歳、高校2年生。173cm。まだ伸びるらしい。

勘が鋭く、よく口が回る。

記憶力はそこそこで思考力は高く、スマレホではないが人の根底を見分けるのは得意である。

『口先道化師』『名前だけ主人公』『傍観者』『部外者』

プリムラ＝運命をひらく、ヒイラギ＝機知・先見の明

【香城 夕夜】（こうじょう しゅくや）／シユクヤ、シユクヤくん、ケモノさん

17歳、高校2年生。177cm。もう伸びないかも。

五感が優れており、感覚に対する記憶力と照合力は常軌を逸している。

そのわりに人物・言語などに対する記憶力はゼロに近い。

分かつていても、聞かないと答えない。すこしほんやりしている。よく流される。失敗すると分かつていてもとくに止めない。それが自分にとつて損だと分かつていても。

甘いもの大好き。とくにプリンには目がない。

『無関心の災厄』『野生のケモノ』『天然マイペース男』『プリン魔人』

イベリス＝無関心・心を惹きつける

【枝守 スミレ】（えだもり すみれ）／先輩、スミレ先輩、花屋さん

18歳、高校3年生。152cm。ちっさい。

いつも楽しそう。半端に敬語。

相手にあだ名を付けるのとマモルに突撃するのが趣味。なんだかまだいろいろ隠している。

『名付け親』『ゴッドファーザー』
『伯楽遊戯』

スミレ＝誠実

【白根 葵】（しらね あおい）／白根、アオイさん、アオイちゃん

17歳、高校2年生。162cm。

常に冷静。口調がロボットっぽい。

身体能力は非常に高く、水晶の爪を使って戦闘する。

『無表情美人』『転校生の美少女』『ロボット作業機械』『完全な美』

シラネアオイ＝完全な美

【香城 珂清】（こうじょう かくせい）／カスミさん、叔母さん
29歳、178cm。すらりとしたモデル体型。
環境庁下の珪素生命体に関する組織に属する。一般的に非公開の
国家組織。

美人。さっぱりしている。口調が男前。

『国家権力』『アルカンシエルの店長』『養い親』

カスミソウ＝無邪氣、魅力

【望月 桂樹】（もちづき けいき）／伝道師、ケーキさん
25歳、アオイの組織の研究員。189cm。でかい。

黒髪を細く後ろに纏めて流している。眼鏡のフレームちっちゃくて青っぽいレンズ。

人を馬鹿にした態度。謎かけが大好き、マモルが大好きですぐち
よつかいをかけてくる。

『災厄の伝道師』
エヴァンゲリスト

月桂樹＝栄光・勝利

おまけ2 「次回予告」

続編「無関心の災厄」 ワレモコウ のプロローグです。
企画作品としては間に合わなかつたので、次回予告としてあちこち切り取つておまけに投稿しておきます。

*****「無関心の災厄」 ワレモコウ 予告(?)

「この世で最も恐ろしいイキモノは人間だ

昔、漫画だかアニメだかで、こんな台詞を見た事がある。

この命題は^{ホントウ}真実で、^{ウソ}虚偽だ。

ヒトほど卑屈で、卑怯で、卑下する卑劣なイキモノは他に存在しない。

ただその脆弱さゆえ、ヒトは思考し、学習し、周囲を貶める事を自覚した。長い歴史の中でヒトはその力に目覚め、使い方の試行錯誤を繰り返してきた。

だからこそ、ヒトは恐ろしい。

その武器は頑丈な牙ではなく、鋭利な爪ではなく、ましてや骨でも筋肉でも^{カラダ}全体のどの部分でもなかつた。

ヒトが武器として選んだのは、『言葉』という形無きモノだつた。牙よりも頑丈にヒトを縛り、爪よりも鋭利にヒトを傷つけ、時に不可能と思われる治癒の力さえ持つ『言葉』。

それは、ヒトが持つ唯一最強の武器。

武器をいかに巧みに操るかが、どれだけ強いかという証となるのだ。

しかし最後に付け加えるならば、この命題には一つだけ条件がある。

それは、この命題を使用する本人もまたヒトである事

長い枕詞になつたが、要するに何が言いたいかつて言うと、オレは今現在、目の前に出現した人物に恐怖している、というたつた一文を導きたかつただけなのだ。

限界まで握りしめた拳は、とつくに感覚がなんぞ残つていない。首筋がすうっと冷えるのは、きっと汗が蒸発していく所^{セイ}為だ。

「キミは不思議やなあ」

「コトバは魔法なのです」^{ゴッドファーザー}それは、見た目は最上級の可愛い女の子でも中身は『名付け親』であるオレの先輩が、いつだつたか言つていた事だ。

オレはその言葉を疑つていた。未熟なオレにはまだ魔法が使えないかつたために、魔法の存在自体を疑つたのだ。でも、違う。

この世に魔法つてのは存在する。それは、時にヒトを縛り、戒め、殺し、傷つけ、癒し、鬻り、弄ぶ。ヒトが扱う最強の魔法だ。

現実にオレがここで硬直しているように。

「見た目も、能力も、経験も……なんもかんも全く一般人やいうんに、あり得んほどめちゃめちゃ強い極性を持つてはる」

オレのすぐ目の前に佇む細い眼鏡の男は、さも可笑しそうに目を細めた。

細く束ねた長い黒髪が風に靡き、風を巻き込んで翻る。

「キミは^{ホンマ}本当に不思議やわ」

もう一度同じ台詞を吐いた『災厄の伝道師』^{エヴァンゲリスト}は、オレをその場所

に釘付けにしたまま、口元を笑いの形に歪ませた。

楽しそうに石畳を飛び降りていく隣の夙夜を見ながら考える。そんな事は絶対にないと思うのだが、もし、コイツが本気で、一つの目的を持つてその能力を使い始めたらいつたいどうなるんだろう、なんて考えて不安に思う事がある。

能力に無頓着であるがゆえ、ギリギリラインで保つ事の出来た人間性はけし飛び、おそらく夙夜は『野性のケモノ』の本性を現す。それは果たして、いつたい、ヒトなんだろうか。

オレは、あの伝道師エヴァンゲリストからコトバの恐怖を受けることでヒトである事を実感した。

しかし夙夜はどうだらう。

果たして「コイツはヒトであり続ける事が可能なんだろうか ?

「柊護さん、香城夙夜さん、そして、枝守スミレさん

白根は、いつもと同じように淡々と、静々と肅々と、オレたちの名を呼んだ。

これは終わりなんかじやなかった。

「以上3名に対する説明許可申請が受理されました」

もう逃げられない。

「本人の許可を求めます」

自分で望んだことなのに。

オレはこの世界に触れたいと。

「いいよ」

「いいです」

「どうしてこんなにも恐怖に喉が震えるのだろう?」

「……いいぜ、田根」

「虚偽 かもしだれない。

真実かもしだれない。

もしかすると、そんな「タエ」は存在しないのかもしだれない。

それでも、オレは。

「ちょうどお前が何者か知りたかったといひるだ」

誰か震えを止めてくれ

「こんな最後までお付き合っていただき、本当にありがとうございました!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5443g/>

無関心の災厄

シラネアオイ

2010年10月8日14時44分発行